

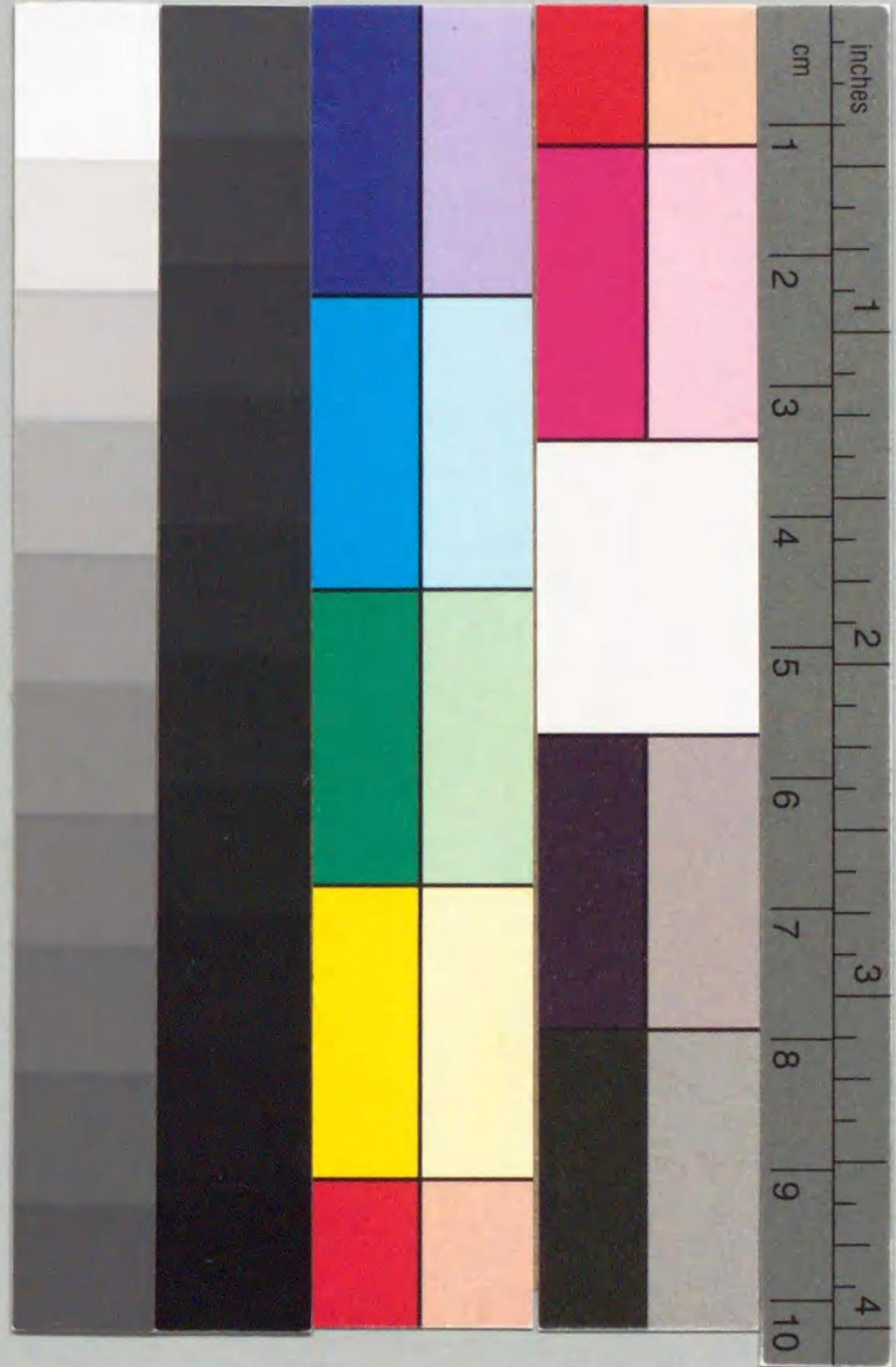
32-385



1200501247822

32
35

Ⓜ





32-385

巖谷小波序文
諸星絲遊著

古代神話

やしりき

お伽噺

博文館藏版

明治
42 2 24
内交

大方のお伽噺が、古代の神話、佛説から出て居る事
わ、何人も非認せぬ所であろう。されば希臘の神話の
如きわ、今日専ら行われつゝある、泰西のお伽噺の爲
めにわ、その母であると云つて可い。

然るに此種の文學わ、偶々外國語を學ぶ者か、或わ
専門學者にこそ知られたれ、之を兒童の讀物として、
平易に、面白く記述した者わ、殆んど數える程も無か
つた。

茲に友人諸星君わ、實際の教育家であると同時に、
又多趣味の文學者である。頃日その研究する所の、希
臘神話數篇を集めて、専らお伽噺風の記述を試みた。
思うに此書わ、大に兒童の歡迎をうけて、その智識
を開發する事わ、決して少からぬであろう。實に僕わ、
我邦お伽文學界の、多年の缺陷を補い得る物として、
更に此書を歡迎するものである。

明治四十二年一月

小波誌

卷のはじめに

聖書と神話とが、西洋文學の源泉であることはい
ふまでもないが、これはむしろ單にお伽噺として書
いたままで、少年少女の讀物として無論面白く、且側
面から多大の教訓が暗示せられてゐる。

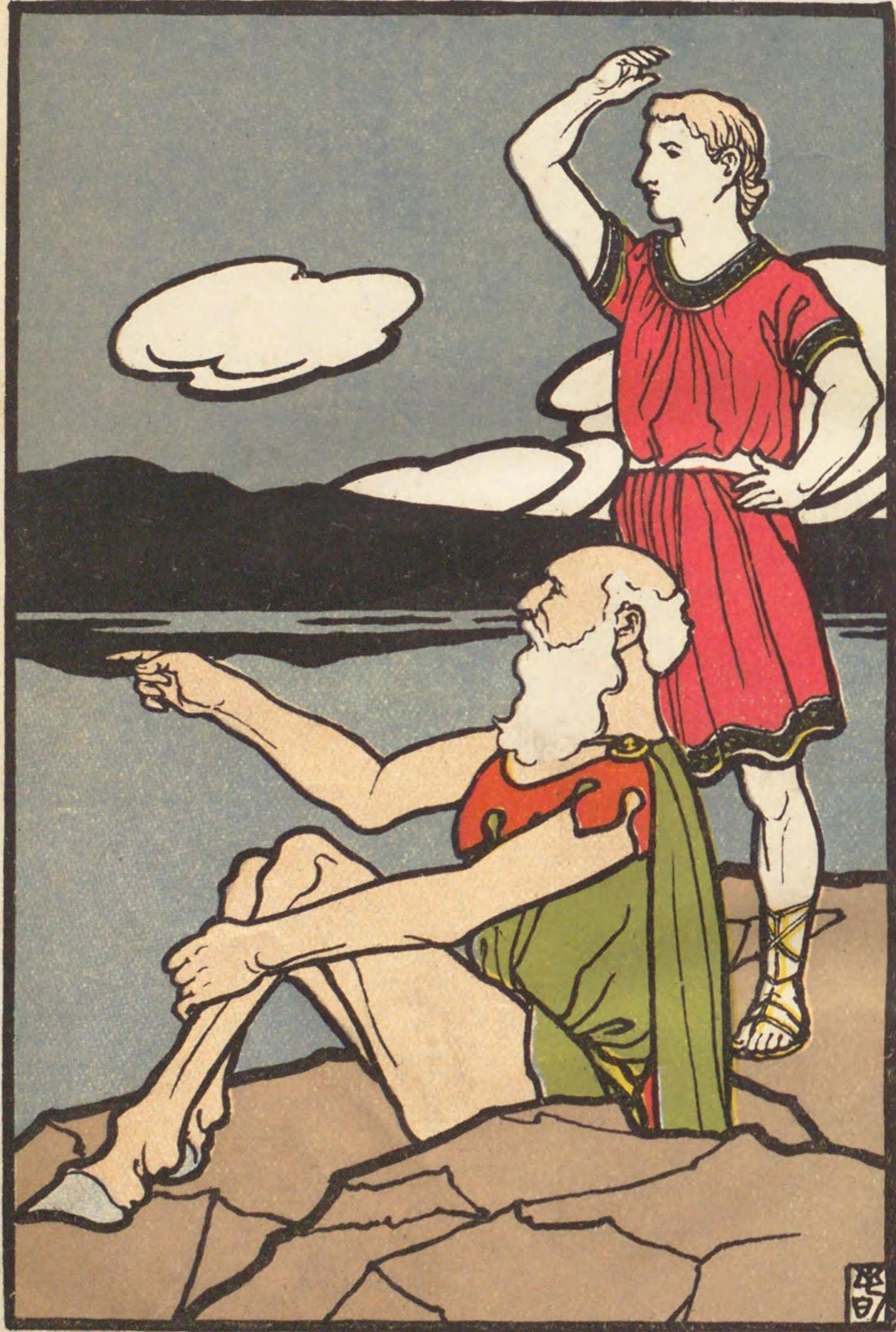
この話の種は、チャアルス、キングスレイの「グリ
クヒロース」と、ジエームス、ボルドキンの「オールド、グ
リーク、ストロイズ」とから採録したものである。

尙この書を公にするに當つて、多大の御助力を與
へられた巖谷小波先生に對して深く御禮を申上げ
ます。

明治四十二年一月

著者識







古代神話 ぎりしやお伽噺

目次

(一) 不思議の機 一

一 光の糸

(二) 大蛇の森 一三

一 夢しらせ

二 半人半馬の神

三 二つの誓

四 片足の草鞋

五 アルゴ艦の出發

六 六本腕の化物

七 風の神の戦

八 氷の山

九 お天道様の子

十 恐ろしい森

十一 不思議の油

十二 魔法くらべ



(三) 大洪水

- 一 大雨
- 二 星の使
- 十三 大蛇の脊渡り
- 十四 不知の海
- 十五 魔女が島
- 十六 歌くらべ
- 十七 ろくろつ首
- 十八 敵の中
- 十九 歌の徳
- 二十 目出度凱旋

(四) 牛頭魔

- 一 力もち
- 二 二品の寶
- 三 決心
- 四 蜘蛛男
- 五 女神の群
- 六 正覺坊
- 七 骨の山
- 八 不思議の寢床
- 九 おひはぎ
- 十 從兄弟同士
- 十一 魔女の盃
- 十二 秘密の罪

(五) 影法師

- 一 乞兒
- 二 妙な馬車
- 三 身代り
- 十三 敵の使者
- 十四 黒帆の船
- 十五 伶俐な悪者
- 十六 さゝる堂
- 十七 命の絲

(六) 怪しの首

- 一 豫言者
- 二 島流し
- 三 留守の災難
- 四 妙な夢
- 五 母の涙
- 六 敵の計略
- 七 神の助け
- 八 不思議の草鞋
- 九 雪女郎
- 十 天女のをどり
- 十一 怪しの首
- 十二 大競走





目次終

- 十三 大暴風
- 十四 開けた市
- 十五 人か像か
- 十六 魔物が岩

-
- 十七 人間の化石
 - 十八 恐ろしい楯
 - 十九 仇討
 - 二十 夫婦星

不思議の機

- 一 光の糸
- 二 神の織物



(一) 光の糸

むかしぎりしやといふ國に、アラチ子といふ一人の女がありました。

顔は美しく、眼は涼しく、髪の毛は金のやうでありました。それで毎日何をしてゐるかといふと、朝からお晝までは日向へ出て糸を紡ぎ、お晝から夜までは日影へ入つて機を織つてゐるのであります。

ところがこの女の織つた機といふのは、實に何ともいはれない程きれいなものでありました。麻でも、羊の毛でも、絹でも、一度この女の手にかゝつたら、それはもう極薄い、柔らかな、ピカ

ピカ光る布になるので、近所の者が皆不思議に思つて、見にくる位でありました。で、自分でいふには、

『私の機は麻や羊の毛の、絹などはかりでこしらへたものと違つて、縦糸にはお天道様の光線、横糸には金の糸をつかふのだ。』かうやつて毎日々々、日向では紡ぎ、日影では織りしてゐましたが、

『この世界に私ほど上手なはたおりはるまい、また私ほどきれいに織れる布はどこにもあるまい。』といつてゐました。するとある人が、

『一體誰がそんなにきれいなものを、紡いだり織つたりするやうに教へてくれたのか。』とききました。するとアラチ子は、



「誰にも教はつたのではないさ。唯私が日向で紡ぎ日影で織ることを覺えたまでさ。」といひました。

「いや、併しそれは智るの神様のアテー子が教へて下さつたにちがひない。唯お前は氣がつかないのだらう。」

「何アテー子！ 馬鹿なことを！ あの神様がどうして教へるところができませんか。あの神様になんでこんなきれいな糸が紡げますか。なんでこんな美しい機が織れるもんですか。もしできるなら拜見したいものだ。アテー子なんかには私の方で教へてやるわ。」

すると其時戸口のところに、一人の丈の高い女が、長い外套をきて立つてゐました。美しいまじめな顔で、青い眼は鋭く輝いて

ゐましたので、アラチ子はまともに見ることができませんでした。するとその女は、

「アラチ子！ 私は智るの神アテー子です。私は今お前の自慢したことをすつかりきゝました。しかしやつぱりお前は、私に紡いだり織つたりすることを、教へてもらつたのではないといひはりますか。」ときゝますと、アラチ子は、

「えゝえゝ誰にも教はりはしません。ですから誰にもお禮なんかいひませんよ。」といつて高慢らしく、機のそばに立ち上りました。するとアテー子の神は、

「そんならやつぱりお前は私よりも、紡いだり織つたりすることが上手だと思ひなのだね。」といひました。アラチ子は顔の色

をかへて、

「勿論ですとも、お前さんなんかに負けるもんですか。」

「そんならけふから三日の後、二人で織りつくらをしよう。お前は自分の機、私はまた私のでやります。そうしてジュピテルの大神様をはじめ、大勢の人たちにどつちがよくできたか見てもらほう。それでもしお前の方が勝つたら、私はもうこの世の終りまで機を手にすまいし、もしまた私の方が勝つたら、お前も決して一生機を手にとらないことにきめよう。さあそれが承知か。」

「えゝえゝ百も承知！」

「よろしい。」といつてアテー子の神はどこかへいつてしまひました。

(二) 神の織物

やがて約束の日になると、ジュピテルの大神は雲の間から、大勢の人たちは二人のまはりに集つて見物しました。

アラチ子は蝶々のとんでゐたり、こほろぎの鳴てゐる桑の木の下に機を据ゑ、またアテー子は空中に自分の機を据ゑつけました。そこでアラチ子は、一番いゝ糸をとつて織り出しましたが、その織物の光つて美しいことは、まるで空中に浮いてゐるやうで、また丈夫なことは獅子の網にこしらへても大丈夫な位でした。それですから見えてゐる人たちは互に感心しあつて、



『なるほど自慢するのにも無理ではない。』といひましたが、ジユピ
 テルの大神もうなづいて見せました。

今度はアテ子子の番で、まづ山の峯に光つてゐる日光や、空に
 浮んでゐるまつ白な雪のやうな雲や、青空の青い空気や、野原の
 緑色の草や、梢の紫色した葉や、いろいろと取りまぜて織り出し
 ました。

するとそのきれいなこと、まるでもうゑのやう。庭に花の咲い
 てゐるところもあり、高い塔の立つてゐるお城もあり、大きな山
 もあり、きれいな獣もあり、町を往來してゐる人間もあり、雲の
 上に住んでゐる神様もあり、それはそれは美しいので、見物して
 ゐた人は皆見とれてしまつて、アラチ子の機なんかは忘れてしま

ひました。

これを見たアラチ子も、大そう恥かしくなり、両手で顔を押し
て泣き出しました。

「お、私はもう、どうして生きてゐられやう。こんなに負けてし
まつたから、約束通りもう一生機を手にすることはできないの
だが、私の性分として一日でも紡いだり織つたりせずに、生き
てゐられない。」

するとアテー子はあはれな女がかわいさうになり、
「そんなら約束はゆるしてやらう。さうして紡いだり織つたりし
て一生暮すことはゆるしてやる。けれども唯機だけはどうしても
も手をつけさせない。お前は一日でも紡いだり織つたりせずに

は、生きてゐられないといふならば、機をもたずにできる者に
してやらう。」

といつてアテー子は、もつてゐた槍の穂先をアラチ子のからだ
にふれますと、あら不思議！ 忽ちアラチ子の女の姿は消えて、
一疋の蜘蛛になつてしまひました。

それからといふものは、このアラチ子の蜘蛛は機なしで、一生
紡いだり織つたりして生きてゐるので、よく方々の木の枝なんか
に、巣をつくつてゐる蜘蛛の先祖は、このアラチ子だといふこと
であります。





大蛇の森

- | | |
|----|---------|
| 一 | 夢じらせ |
| 二 | 半人半馬の神 |
| 三 | 二ツの誓 |
| 四 | 片足の草鞋 |
| 五 | アルゴ艦の出發 |
| 六 | 六本腕の化物 |
| 七 | 風の神の戦 |
| 八 | 氷の山 |
| 九 | お天道様の子 |
| 十 | 恐ろしい森 |
| 十一 | 不思議の油 |
| 十二 | 魔法くらべ |
| 十三 | 大蛇の背渡り |
| 十四 | 不知の海 |
| 十五 | 魔女が島 |
| 十六 | 歌くらべ |
| 十七 | ろくろつ首 |
| 十八 | 敵の中 |
| 十九 | 歌の徳 |
| 二十 | 目出度凱旋 |



(一) 夢 じ ら せ

むかしぎりしやはミニエルといふ國に、アタマスといふ一人の王がありました。フリクソスといふ息子と、ヘルレといふ娘がありました。二人とも先妻の兒で、繼母のイノといふ人にも、やつぱり二人の子供がありました。

よくある話で、このイノといふ繼母も、どうかして自分の兒を相續人にしたいと思ひ、それに就てはフリクソスとヘルレをば、無いものにしてやうとばかり考へてをりました。すると或年のこと、國中が大飢饉になりました。野にも山にも、青いものは皆無くなつてしまふといふ有様。平生から悪計をしてゐるイノは、今こそ

二人を殺してしまふ時だと思ひ、かういふことをいひ出しました。

『國中がこんな大飢饉になつたのは、何でも神様の罰が當つたのにちがひないから、立派なお供物をして、ごきげんを直していただくかなければならない。それにはあのフリクソスとヘルレの二人を、いけにへに上げるのが、一番いゝことだと思ふ。』

と、かういひますので、元より威勢のあるお后様のお言葉、誰一人それはいけなまいふ者もありません。すぐに二人を社へ連れて行き、今にも斬り殺して、その生々した肉と血を、神様に供へようと思いました。かわいさうなのは二人です、罪もないのに殺されるのかと、まつ青になつて震へてをりました。すると天が俄に曇つて、黒雲がむくくと湧き起り、忽ち夜のやうにあたりが

まつ暗になつたかと思ふと、ピカピカと光つて、それはそれは怖ろしい大きな牡羊、しかも身體中が残らず金の毛の羊が現はれてアツといふ間に二人を脊中へのせ、どことも知れず消えて無くなりました。

それからアタマス王は氣狂ひになり、或時イノの子供を、一人刺し殺しましたから、イノは驚いて、もう一人の子をかゝへたまゝ、あはてゝ家を飛び出し、高い崖の上から海の中へ身を投げて、とうとう海豚に化けてしまひました。

ミニエルの人たちは、罪のない子供を殺したといふので、アタマス王を追ひ出してしまひました。アタマスはどこといふ目的もなく、方々うろつき廻りましたが、終にデルヒといふ所の社へき

て、神主に願ひ、自分の身の上を神様に伺つてもらひました。すると神様のお告げには、お前はまだ罪が消えないから、もつと落ちぶれなければならぬ、そうして終には、獸の仲間へ入つて、御馳走になるやうなことがあるだらうといひました。それからアタマスは、また長い間方々うろつき廻りましたが、ろくに御膳がたべられなかつたものですから、お腹がすいてく、今にも倒れさうになりましたが、ふと向うの方を見ると、狼が大勢集つて、一匹の羊を皆して割いて、たべやうとしてゐるところでした。しかしアタマスの姿を見ると、狼は皆逃げていつてしまひ、後には唯羊の肉ばかり残つてゐましたから、丁度いゝ幸と皆たべてしまひました。その時アタマスは、神様のお告げを思ひ出し、これで罪

が消えたといつて、そこに家をたて、町をこしらへ、自分はまたその王様になりました。

さて、フリクソスとヘルレとの二人はどうなつたかといふと、金の羊に負さつたまゝ、山を越して、河を越して、ケルソ子スといふ所まできました。が、かわいそうなことには、こゝでもつてヘルレが海の中へ落ちて死んでしまひました。その時からこの處をばヘルレスポンドといつたので、丁度今のダアダ子ルス海峽のところです。フリクソスはいゝあんばいに落ちませんでしたから、エウキシヌスの海（今の黒海）を乗り越して、ずうつと北の方へ行き、とうとうコルヒスといふ所へ止りました。こゝはコウカサス山の麓で、アイエーテスといふ王様の領分なのです。フリクソ

スは大そうこの王様にかわいがられ、カルキオプと云ふお姫様を、自分のお嫁さんにもらひましたが、金の羊はお供物として、神様へあげました。するとアイエーテスはその皮を剥ぎ、アレスといふ軍の神様の、聞くも怖ろしい森の中へもつてゆき、大きな山毛の樹へ釘付けにしてしまひました。この森の中はどんなに怖ろしい所であるかといふことは、後でお話いたしませう。

間もなくフリクソスは死んで、そこへ葬られました。が、魂は浮ばれません。なぜといへば、生れ故郷の美しいヘラスの山からずつと離れた遠い所へ葬られたからでした。ですからフリクソスは夢に故郷のミニエル人の所へきて、悲しさうに枕元へ立ち現はれ、『早く浮ばれるやうにしてくれ、さうすれば家へ歸へつてお父さ

んや親類にもあへるし、美しいニエルの土地を見ることもできらる。

『それならどうすれば、浮ぶことができるのか。』

『それは海を越してコルヒスへ行き、金の羊の皮を家へもつてきてくれ、ばいゝのだ。さうすれば私の魂は一緒に家へ歸ることができ、私は安心して天國でねてゐられる。』

かういつて度々頼みにきました。誰一人それでは私が行つて見ようといふ、えらい者もありませんでした。それといふのもまだそのをりがこなかつたからなのであります。

(二) 半人半馬の神

フリクソスには、アイソンといふ一人の甥がいました。イオルクコスといふ國の王様でありましたが、このアイソンに、ペリアスといふ腹ちがひの兄弟が一人ありました。このペリアスは女の子で、まだ赤子の時分、山の上へ棄てられたのですが、その時一匹の野馬が傍へやつてきて、ペリアスをは蹴とばしました。が、仕合せとそこへ一人の羊飼が通りかゝつて、この赤子を拾ひ上げ、家へ連れてきてペリアスといふ名をつけましたが、そのわけは面中か傷だらけで、色がまつ黒だからなのです。其中にペリアスは大きくなると、まことに亂暴で無鐵砲で、いろんな恐ろしいことをしましたが、終にはアイソンをば追ひ出してしまひ、自分がその國を横取りしてしまひました。

そこでアイソンはしほしほとして家を出かけ、小さい息子の手を牽いて後ろの山の方へ行きながら、獨言をしていふには、
 『どれ山の中へこの子を隠してきよう。さうしないと、この子は私の相續人だから、きつとあのペリアスめが殺してしまふにちがひない。』

かういひながら森を通り谷を渡つて、てつぺんが雪でまつ白になつてゐる、ペリオンといふ大昔の山の上へ登つてゆきました。さうして木の根や岩角を越えて、夜通し上の方へ行きましたが、やがて夜明け頃になると、子供は疲れきつて歩けなくなりましたから、アイソンは子供を負つて、とうとう大きな崖の下にある、淋しい洞穴の口までやつてきました。

崖の上を見上げると、雪の冠がかゝつてゐて、それが日に當つてポタポタと解けるやら、パチパチとわれるやらしてゐました。下の方を見ると、洞穴の周りには美しい花が澤山咲いてゐて、其の上からは瀧のしぶきがさあつとかゝつて、實に何ともいはれないいゝ景色でした。さうして耳をすまして聴くと、洞穴の奥の方からいゝ音のする音楽の響が聞えて、誰だか縦琴を弾いて歌を歌つてゐる様子でした。アイソンは子供を脊中からおろし、
 『これ怖がることはない、お前はこの洞穴の中へ入つていつて、誰にでも逢つたらよくお辭儀をして、お願いでございませう、どうか私はけふからあなたの家へ、御厄介になりたうございませう、とかういひな。』

といひつけました。するとその子は流石に勇士の子ですから、ちつとも怖がらずに穴の中へ入つてゆきました。するとどうでせう。向うの方に實に奇體なものが坐つてゐました。それは腰から上は半分人間で、腰から下は半分馬なのです。さうして銀のやうな髪の毛が肩の上にふりかゝり、雪のやうなまつ白な髯が胸の上に垂れてゐて、熊の皮やいゝ香ひのする草の上に坐つて、膝に金の縦琴を抱へ、手に金の撥をもつて、いゝ聲で歌を歌つてゐましたが、眼はキラキラと光つて穴の中が明るくなつてゐました。これはケイロンといつて、世界で一番伶俐な神様なので、このペリオン山の上で、大勢の勇士の子に、いろんなことを教へてやる神様なのです。

アイソンの息子は、お父さんのいひつけたことも忘れて、暫くはうつとりとして、心持のいゝ歌を聴いてゐましたが、終にケイロンはやさしい聲で、

『これこれ、お前のお父さんのアイソンもこゝへ呼んでおいで。私はお前達がどうして尋ねてきたか皆知つてゐる。お前達が市を出かけて谷を渡つてくるところも、とつくに見て知つてゐる。』すると丁度アイソンが入つてきたので、ケイロンは、

『なぜお前は自分でたのみにこなかつたのだ。』

『へい恐れ入ります、實はこの子一人であげましたら、あなたが不便に思召て下さるだらうと考へましたし、またこの子が臆病だかどうだが、試めしてやらうとも思ひましたのでございます、

どうか。この子を他の子供たちと同じやうに、今日からあなたの家へお預り下さいまして、大きくなつたら父の仇を取るやうにお願ひ申します。』

かう頼みましたので、ケイロンは笑ひながら、よしよしとうなづいて、その子を自分の傍へ引きよせ、

『さあ、今日は日がくれるまで、おちさんと一緒に遊んでおいで。今に大勢お友だちがかへつてくるから、さうすると皆と一緒によく勉強して、大きくなつたら立派な國の王様になるのだよ。』
そこでお父さんのアイソンは、別れを告げて歸りましたが、その子はこの奇妙な洞穴や、半人半馬の神様や、またその歌や、今に歸つてくるといふ大勢のお友だちやなんかのことに氣を取られ

て、ちつとも悲しいと思ひませんでした。

その中にヘラクレスだの、ペレウスだのを始めとして、大勢の勇士の息子たちが、ワイワイいつて歸つてきました。今日は山獵にいつたと見えて、鹿だの、山羊だの、兎だの、銘々得物をもつて威勢よく歸つてきました。ケイロンは嬉しさうに出迎へて、一その手柄を賞めてやり、アイソンの子を皆に引き合せて、お仲間入りをさせました。大勢の子供は喜んで仲間へ入れ、いろんな話をするやら、ものをもつてきてやるやら、もう大仲よしになつてしまひました。

それから皆は、山から薪を拾つてきて、焚火をしながら、獸の肉を炙り、その間に瀧へかゝつて身體を洗ひ、さうして丁度よく

焼けた肉を十分にたべ、水晶のやうによく澄んだ泉の水をのみ、
 焚火の周りに獣の皮や木の葉をしき、それからその上へ坐つて、
 代り番こに琴をひきながら歌を歌ひ、それから廣原へいつて柔か
 な草の上で、角力をとるやら、競走をするやら、思ふ様遊び狂ひ、
 終に皆手を繋いで圓くなり、ケイロンの弾く歌に合はせて、ぐる
 ぐる踊り廻つて、夜明け頃まで遊んでゐましたが、その中に皆柔
 かでいゝ香ひのする、木の葉のね床に入つて、さも心持よさゝう
 にねてしまひました。

アイソンの息子も、この仲間に入つてからは、だんだん大きく
 なり、力も強く知るもつき、いろんな藝事を教はりましたが、中
 でも薬の草でもつて、人の病氣を治すのが一番上手でしたから、
 ケイロンは『お醫者のヤソン』といふ名をつけてやりました。

(三) 一二つの誓

其の中に十年程たつて、ヤソンはもう一人前の大人になりました。
 た。お友だちのヘラクレスやベレウスなんかも立派な人になつて、
 それぞれ自分の國へ歸りましたが、ヤソンは獨ペリオンに残つて
 いました。或時のこと、ケイロンと一緒に高い山の上へ上つて、
 方々見廻はしましたが、南の方を見ると美しい山々が屏風のやう
 に續いてゐて、青々とした木々の間から煙が立ち上り、さうして
 ずうつと向ふには銀のやうにキラキラ光つてゐる海が見えまし
 た。これはイオルコスで、自分の生れた所ですから、お父さんの

うちやペリアスのことやなんか思ひ出し、ケイロンに向つていひますには、

「皆は私のことを、あの美しい國の相續人だつていひますが、ほんとはどうですか。」

「あゝほんとも、しかしヤソン！ お前があの國の相續人ならどうしようと思ふか。」

「もしほんとうにさうなら、私はこれからいつてあの國をもらはうと思ひます。」

「むゝ、しかしもうあの國は強い人がとつてしまつたのだ、お前はペリアスより強いかどうか。」

「それは分かりませんが、私はペリアスと力くらべを試してみようと思ひます。」

「だがヤソン、お前があのイオルコスを取るまでには、誰もまだ見たこともないやうな、いろんな怖い目に逢はなければならぬが、どうだ。」

「えゝようございますとも、いくら怖くつたつて、まだ誰も見ないやうな目にあふのは、却て有難いと思ひます。」

「さうか、それでこそ勇士の子だ。しかしお前があそこへ行く前に、固く誓はなければならぬことが二つあるが！」

「えゝ誓ひますとも、何でも誓ひます。」

「ハゝゝ大分えらいな。そんならいつて聞かすが、二つの誓ひといふのはかうだ。一つは誰にでも親切にするといふこと。それ

からもう一つは一度いつたことは固く守るといふこと、この二つなのだ。』

ヤソンはどんなむづかしいことかと思つたら、こんな易しいことでしたから、却つて少し驚いた位でしたが、このケイロンは豫言者で、百年先のことも知つてゐる神様ですから、ヤソンはすなほにこの二つの誓ひをし、それからすつかり身支度をして、長々お世話になりましたといつて、ケイロンに別を告げ、ペリオン山のとつぺんを下つて、昔お父さんのアイソンと一緒に逃げてきた時のことを思出しながら、イオルコスの方へと歩いてゆきました。すると途に、アナウロスの瀧といふ、大きな瀧があつて、其の時は丁度夏の洪水の時分でしたから、百千の雷が一時に鳴り下るやうな音をして、瀧壺に落ち、それがまた百千の獅子となつて飛び出してゆくやうに、大きな石を轉がし、あたりの草をなびかせて、ごうごうといふ怖ろしい音を立て、流れてゐます。しかしイオルコスへゆくには、是非この流れを渡らなければならぬので、流石のヤソンもあきれ立てて立つてゐましたが、ひよいと傍の方を見ると、白髪頭の老婆さんが一人、岩に腰をかけて中氣病みのやうに、ぶるぶる震へながら、やつぱりこの流れが越せないで、困つてゐる様子でしたが、ヤソンを見ると泣き出しさうな聲で、

『誰か私を負つてこの流れを越してくれ、ばい、な。』

といひましたが、自分一人できへ危い位ですから、なかなか人を負つて渡ることなんかできません。ヤソンはちれつたくなつて

飛び込まうとしましたが、何しろ怖ろしい勢で瀧は鳴り下る、そのしぶきやら山の雨やらで、あたりは紫色に霞み、崖のてつべんからは雪のとけた氷柱が、銀の脈のやうに垂れ下り、下の方では大きな岩や石つころが、大水に推し流されて、百千の車が一度に駆け出したやうに響き渡り、二人の立つてゐる岩までがぶるぶると震へました。

老婆さんはまたヤソンの方を見て、

『おいおい、私はこの通り年よりで弱つてゐる身體だ、お前はまだ若くつて丈夫だから、ヘラの神様のために、私を負つてこの流れを越しておくれ。』

とかう大柄にいひました。全體このヘラの神様といふのは、大

勢の神や人間のお父さんに當る、ゼウスといふ一番大元の神様のお妃なので、ずうつと遠いオリムプスといふ山の上に、御夫婦ともお住まひになつてゐるのです。それで世界中の女は皆この神様を守つて頂いてゐるのですから、それでこの老婆さんもヘラの神様のためといつたのです。しかしその頼みやうがいかにも大柄なので、ヤソンはむつとして腹を立て、打棄つてゆかうと思ひましたが、忽ちケイロンに誓つたことを思ひ出し、誰にでも親切にするといふのは、こゝだと思ひましたから、やさしく老婆さんに返事をして、

『はいはい、ヘラの神様のために私は思ひ切つて、あなたを負つてこの流れを越しませう。ぐづくづしてゐると二人とも流され

てしまひさうですから。」

かういつて老婆さんを負ひ、さんぶと音を立て、流れの中へ入りましたが、一歩行くと膝きり、二歩ゆくと腰きりありました。

水勢は速いし、石ところはむやみに足へぶつかつてすりむくので、その歩き悪いこと一通りではありません、一生けんめいになつて、じゃぶじゃぶと歩き出しますと、脊中の老婆さんは大きな聲で、

『意氣地なしめ、私の着物がぬれるぢやないか。お前は私のやうな老婆さんにかからかふ氣か。』

人に負さつてゐながらお禮もいはないで、あべこべに悪口をいひましたから、ヤソンは眞赤になつて怒り、河の中へ放り出さうと思ひましたが、ケイロンに誓つたことを守り、

『勘忍して下さいおばあさん、良い馬も時によつては轉びますからな。ハ、ハ、』

と我慢をしながらやつとこさで向ふ岸へつきました。さうして少し休んでから出かけようと思ひましたが、老婆さんはどうしたらう、お禮位いふだらうと思つて後をふりむきました。

すると不思議！老婆さんはいつのままにか美しい丈の高い好い女になり、着物は夏の海のやうに光つて、所々へ縫ひつけた寶石は星のやうに輝き、額には金の雲で織つた帛をかけ、につこり笑ひながらすうつと立つてをりましたが、身體からは御光がさして谷一面眩しい程光りました。ヤソンはびつくりして思はずその足下に倒れ、両手を合せて拜みました。するとその女は、



「ヤソン！ 私はゼウスの妻ヘラといふ神だ。さつきはわざと老婆さんに化けてお前を試して見たのだ。しかしお前はよく私を親切にしてくれたから、私も亦お前に恩返しをする。だからいつでも困った時は私をおよびなさい。」

ヤソンはこわごわ見上げますと、ヘラはすうつと立上り眞白な雲の柱のやうになつて、オリムプスの山の方へ消えてゆきました。

(四) 片足の草鞋

ヤソンは不思議な思ひをしながら、だんだんとイオルコスの方へ下つてゆきますと、今迄は気がつきませんでした。アナウロスの流れで片方の草鞋をなくなし、片跛になつて街の中を通りま

した。すると往來の人が皆ふり返つてヤソンの足を見ては、何かこそ話をしたり、にやにや笑つたりしてゆきました。終に一人の老翁さんがヤソンを呼びとめ、

「考もしもしあなたは誰です、どこからおいでなすつた。さうして

何の御用できなすつたのかね。」

「はい私はヤソンといふ者で、ペリオンからきたのだが、少し王様のペリアスに用があるので、どうか御殿へゆく道を教へて下さい。」

すると周り中によりたかつてゐた人たちは、忽ち顔の色をかへて眞青になり、やつとこさで一人が震へながらいふには、

「なに王様の御殿だつて？ 飛んでもないことをいふ、お前さん



は神様のお告げを知らないと見えるな、そんな片足の草鞋で御殿へゆかうものなら、それこそ大へんなさわざだ。』

「なに神様のお告げですつて？ 私にははじめてこゝへきたのだから、神様が何を告げになつたか知りません、片足の草鞋もさつきアナウロスの河越しをした時なくしたんです。何にも不思議なことはありません。』

「は、あ、それやお前さんは全く知らないのだな。そんなら話してあげるが、デルヒの社で神様がお告げなすつたことは、片足の草鞋でこゝへくるものがあれば、其人はきつとこの國を取るにちがひない。とかういふお告げなのだからまあ御殿へゆくことはおよしなさい。こゝの王様はずい分酷い人で、おまけに

なかなか狡猾だから、それこそどんなめにあふかも知れないよ。』

するとヤソンは、ハ、ハ、と大きな聲で笑ひましたが、その様子といつたらまるで軍に向ふ馬のやうでありました。そうしていふには、

「大きに御親切様に難有う。だがそのお告げはお互に喜ぶべきことだ、さあもう此方のものだぞ、嬉しいな嬉しいな。』

と皆がびつくりして立つてゐるのも構はず、御殿の方へどんどん馳けてゆきました。

ペリアスの御殿へつくと、いきなり拳を固めて門の戸をぶち破れるばかりに叩き、大きな聲で、

「出てこいペリアス。今こそ貴様と戦つて父の仇をとつてくれる、さあ早く出てこい、出ないかつ！」

かういふのでペリアスはびつくりして外へ飛びだし、

「誰だ、誰だ！」

「ヤソンだ、アイソンの息子だ、この國の相續人だ。」

とつゞけざまに怒鳴りますと、何思つたかペリアスは両手を高くさしあげ、天を仰いで自分の甥が尋ねてきたことを神様にお禮を申し、さてヤソンに向つていふには、

「やあヤソンが大分立派になつたな、まあまあそんなに怒つてくれるな。私は三人の娘の外に、一人も男の子がないのだから、どうか私の相續人になつてこの國をもらつてくれ。そうして三

人の娘の中でどれでも、お前の氣に入つたのをお嫁にしてくれ。

この國はまことにいやなところで、王様になる人はまことに不仕合せだけれども……まあそんなことは後でいゝから兎に角内へお入り、何にもないけれども御馳走しよう。」

そこでペリアスは無理にヤソンを坐敷へ通し、いろんな御馳走を出してもてなしましたから、ヤソンは張合がぬけて先刻の腹立もどこへやら、却つて三人の娘を見てどれをお嫁さんにしようかなんて考へてをりました。やがてヤソンはペリアスに向ひ、

「叔父さん、あなたは何か心配があるやうな顔色ですね。それにさつきこの國はいやな國で、王様になる人は不仕合せだといひなすつたが、あれはどういふ譯ですか。」

「さあ、其の事だが、私も七年ばかりの間、唯の一晚でもやすやすとねたことはないのだ。だが私ばかりではない、私の後で王様になる人も、やつぱりねられないにちがひない。それはまたどういふ譯かといへば、毎晩フリクソスのお化けが出て、「恨めしや、まだ浮ばれない、早く金の羊の皮をとつてきてくれ。」といつては脳まされるので、私は今にとり殺されるだらうと思つて、御膳もろくに喉へ通らないのだ。」

とかういつて、有ることないこと取りませフリクソスの話をしながら、大へんに御馳走をして、精一杯ごきげんをとりましたので、年の若いヤソンはそれを皆ほんとうにして、ペリアスといふ人は世間でいふやうな悪い人間ではないと思ひました。

ペリアスはもうすつかりヤソンをだましてしまいましたから、もう一つおまけに欺くらかして、ヤソンに金の羊の皮をとりやり、その後で自分は安心して、ゆつくりこの國を勝手にしようと

思ひ、わざと心配さうな顔をして、

「時にヤソン、フリクソスのお化けも怖いが、もう一つそれよりも心配なことがあるのだが、何と一つ智恵をかしてくれまいか。」

「叔父さん、その心配といふのは何です。」

「外ではないが、この世の中で一番私には怖い人が一人あるんだ。その人は今は私より強くはないが、終には私をきつとひどい目にあはせるにちがひない、それが何よりも一番私の心配なの



さ。

「叔父さん、そんなことなら心配するには及びません。その人に
いひつけて、金の羊の皮をとりやつたらいでせう。あれを
とりにゆくのは命がけの仕事なので、大概生きては歸られない
のでせうから、死にゝやるも同じことです。さうすればもう、
何も心配なことはなくなるぢやありませんか。」

するとペリアスは占めたといふ顔付で、氣味の悪いほゝゑみを
しながら、ヤソンの顔をじつと見つめました。するとヤソンは根
が惻憫な人ですから、忽ちペリアスの心を察してしまひ、街で老
翁さんの話したことや、片足の草鞋や、神様のお告げやなんか思
ひ出して、こいつはわなにかゝつたなと思ひました。しかしペリ

アスはおちつきはらつて、

「これヤソン、そんならすぐにその人をとりにやらう。」

ヤソンは眞赤になつて腹を立て、いきなり拳をふりあげて、

「それぢやおれのことをいふのか。」

と大きな聲を出しましたが、ペリアスはゆうゆうとして。

「まあまあ静におし、私は何もお前のことはいやしな。お前が
自分で私の事だといつたのぢやないか。しかしヤソン、もしそ
の人が勇士の子なら、喜んで金の羊の皮をとりゆき、世界一
のえらい人だといふ名前をあげるにちがいないと思ふ。それか
らその人は私がゆくといつたからには、よもや詐をつきはしま
いと思ふね。」

ヤソンはすつかりわなにかゝつたと思ひましたが、いつかケイロンに誓つたことを思ひ出し、一度いつたことは固く守るといふのはこゝだなど思ひましたから、

「むゝ叔父さん甘くやつた。いかにも私は名をあげたいし、また一度いつたことは固く守る、よし！喜んで金の羊の皮をとり、ゆきませう。だが其間よくお父さんのアイソンを世話して下さい、さうしてもし私が見事に歸つてきたら、この國はたしかに下さるでせうね！」

「なに金の羊の皮をとりに行く？ えらいえらい！ 實にえらい、それでこそ天晴れ勇士だ、さういふ勇士に國をゆづるのは少しも惜しくない。」

と今はベリアスもヤソンの勇ましさに感心して、二人とも決してこの約束をたがへないと誓ひました。そこでヤソンはベリアスに頼んでミニエルの國中に使を出し、ヤソンと一緒に行きたいといふ大勢の勇士を呼び集めました。

(五) アルゴ艦の出發

ヤソンが金の羊の皮をとりに行くため、世界初まつて以來の大探検に出かけると聞いて、ミニエル國中の勇士たち、いづれも腕が唸つてゐる時でしたから、もうちつとしてはゐられません。我も我もと集つてきました。其人たちは皆ベリオン山の昔のお友だち、半人半馬の神に育てられて鍛へ上げた荒武者ばかり。大力無

雙のペラクレスを初めとして、船造りのアルゴス、舵取のチビス、天文學者のアンカイオス、其他北風の子にはゼーテスにカライス、また龍宮の神のテーチスの婿ペレウスなどと、一人で千人の敵にも當らうといふえら者たちが總勢すくつて五十人、鎧甲のいでたち花やかに、ペリアスの御殿をさしてやつてきました。

そこで皆はペリオンの山へ入り、大きな松の樹を伐つてきてアルゴスの指圖に従ひ、銘々斧を揮つて大きな船をこしらへました。その船はといへば五十挺の楫を備へ、黒い松脂でおもてを塗り、朱でもつて舳の方へ模様をかき、さて立派にでき上りましたから、アルゴスが指圖をしてこしらへたのですから、これに「アルゴ」といふ名前をつけました。その晩はペリアスの御殿で大それた御馳走になり、皆心よくねてしまひました。

しかしヤソンは唯一人、北の方のトラキヤといふ所へゆき、琴の名人のオルホイスといふ人を誘ひました。するとオルホイスも喜んでヤソンの頼みをば引き受け、琴をかへて家を出ましたが、ヤソンを連れてヒンドスの山を越し、ドナナといふところの社へつきました。こゝは神様のお住ひになるところで、ちき傍の方には、人間が入ることができない大きな湖があり、山の下には大昔の櫛の樹がこんもりと茂つてゐて、其中には火を吹きたしてゐる泉があります。この森の中には、昔から一羽の黒い鳩が住んでゐますが、それはゼウスの大神のお使姫なので、世の中の人たちには神様のお告げを傳へるのであります。オルホイスはヤソンを連れ

てこの森の中へ入り、櫛の枝を一本伐つて神様の前へ供へ、どうかこの枝でもつて途中の災難を被ひのけ、無事に歸つてこられま
すやうにと、暫の間願をかけ、やがてその枝を頂いてヤソンと一
緒にイオルコスへもちかへり、船の舳へうちつけました。

さて仕度もすつかりでき上つたので、船を出さうとしましたが
なかなか重くつて動きません。船底が砂の中へ深く入つてしまひ
ました。皆顔を見合はせてどうしようかと思つてゐると、ヤソン
は早くも舳へまはり、櫛の枝に伺ひますと、オルホイスに歌を歌
はせ其の勢で引張り出せといふことですから、そこでオルホイス
は琴をとつて不思議な歌を歌ひました。

大波小波をのつきつて、海へ乗り出す面白さ。

風は帆綱に歌うたひ、楫は波間に花散らす。

風と波とを友として、海を乗り越す面白さ。

珊瑚の島の珊瑚樹や、蓬萊島の玉の枝、

その寶より珍らしき、金の羊の皮をとり、

百萬年の後までも、高きほまれを輝かせ。

その拍子がいかに面白いで、皆ひとりでに氣が揃つて、エ
ンヤラヤツといひながら力一杯に船をおし出しますと、まるで油
の上でもすべるやうにつるつると海の中へ出てしまひました。
オルホイスはなほ調子を張りあげて面白さうに歌ひますと、皆は
一緒に楫を揃へてぎちこぎちこと漕ぎ出しました。すると大勢集
つてゐた見物人は大きな聲を出してほめはやしましたが、中には

女の人なんか小さな聲で、

『あゝかわいさうに、おの人たちは死にゝ行くのだ。』

(六) 六本腕の化物

さてアルゴナウトの遠征隊はある港に立ち寄り、こゝに少の間風待をしてゐましたが、その間にヤソンをば隊長に選み、賑やかなお酒宴を開いて、皆かうして出かけたからには、お互にきげんよく日を暮らし、隊長の命令にそむいたり、中途でいやになつて歸ることのないやうに固く約束しました。それからまたペレウスのいひ出したことによつて、皆一緒にペリオン山へ尋ねてゆき、もとの先生の半人半馬の神にお別れを告げて、一同勇ましく漕ぎ

出しました。

長いマグネシヤ半島についてアトスの岬を通り越し、ヘルレスポンドを乗つ切つてプロポンチス(今のマルモラ海)といふところへ上陸しました。こゝにはキジクスといふ王様がゐて、自分のお父さんがやつぱり遠征隊の人達と同じやうに、昔ペリオンの生徒でありましたから、その縁で以て大そうに歓迎されました。すると其晩のこと何處とも知れず、恐ろしい六本腕の化物が大勢おしかけてきて、根こぎにした大木をふりかざし、遠征隊のねてゐるところへときの聲をあげてせめよせました。ね耳に水とはこのこととで、遠征隊はびつくりして飛び起きました。例の大力無雙のヘラクレスが、拳固を固めて片端からはり殺しましたから、化物

たちはおどろくまいことか、これは大變といつて皆逃げてしまひ
 ました。しかし何しろ夜のことで眞暗な中でしたものですから、
 どうしたはづみか大事の王様のキジクスまでも殺してしまひまし
 た。さうすると遠征隊がいよいよ出かけやうとしたときに、恐ろ
 しい旋風が吹いてきて纜は皆巻きついてしまひ、船はぐるぐると
 獨樂のやうに廻りましたから、流石の舵取の名人チヒスでさへ、
 どうすることもできなくなつて今は舵を放してしまひ、
 『あゝもう駄目だ、神様に見放されたんだ。』
 といつてがっかりしてしまひました。しかしヤソンはまた櫂の
 枝に伺ひますと、

『それはお前たちがキジクスを殺した罰だから、魂が浮ばれるや
 うにしてやらなければ、この岸を離れることはとてもできない。』
 といひました。そこで皆はまた岸へ上り、ゆふへの戦で六本腕
 の化物が、血だらけになつてごろごろ死んでゐる間を分け、キジ
 クスの死骸を見つけ出して、丁寧にお葬をすましました。またそ
 のお墓の傍でオルホイスが琴をひいて難有い歌をうたひましたか
 ら、キジクスの魂は天國へ登ることができました。

今度は船も安々と出られ、だんだんと東の方へゆきましたが、
 あんまりいゝお天気ですから陸の上で遊ばうと思ひ、ある山の下
 へ漕ぎつけて皆岸へ上りました。ヘラクレスなんかは、おれは山
 へ入つて獸獵をするといつて、弓矢をもつて出かけましたが、ヒ
 ラスといふ人もあとから一緒に山へ遊びにゆきました。全體この

ヒラスといふ人は遠征隊中の美少年でしたから、湖に住んでゐる女の神に見そめられ、水底へ引きこまれてしまひました。やがてヘラクレスはかへつてきて見ますと、約束のヒラスがをりませんから、大そう驚いて方々を探し、迷子の迷子のヒラスやアイト、山がわれる程よんでみましたがつとう見つかりませんでした。その中にもう日が暮れましたからもとの岸へひきかへし、皆と一緒にまた探しにゆかうと思ひながらかへつてきて見ますと、これは大變！ いつの間にかアルゴが出かけてしまつて一艘も船なんかありません。とうとう一人ぼつちになつておいてきぼりにされてしまひました。

(七) 風の神の戦

遠征隊はヘラクレスとヒラスの二人を失して、また海へ漕ぎ出しボスポラスといふ所までまゐりました。こゝの王様はピ子ウスといつて、北風の子のゼーテスにカライスの姉さんをお后にしてゐたのですが、性質亂暴で大さう邪慳な人でしたから、悪い女に欺かれてお后を逐ひ出したばかりか、二人の子供の目をつぶして山の中へすてしまつたのです。それですからゼーテスにカライスは、今こそ仇を取つてやる時だと思ひ、ヤソンに頼んでこのボスポラスへ上つたのでした。

そこで皆も一緒に市を通つてピ子ウスの御殿へゆきますと、瘦せつこけて恐ろしい顔のピ子ウスが出てきました、

『これはこれは、ようこそおいでになりました。この國はまこと



に寒くつておまけに烈しい風の吹く所ですが、しかし私のでき
ますだけは何か御馳走をしてさし上げませう。』
かういつて家來にいひつけ、いろんな御馳走を出しましたから、
皆大さう喜んで箸を取り、あはや口に入れやうとしますと、忽ち
雲の間から恐ろしい羽の生へた化物が、矢を射るやうにとんでき
て、お膳の上のものを皆擱んでゆきましたが、その時の怖ろしい
ことゝいつたら、みしみしと家鳴りがして今にも家根がとんでゆ
きさうになりました。ピ子ウスは青くなつて起ち上り、
『皆さんあれを御覽になりましたか。あれは大鷲といふ風の神で。
いつも大暴風を起してこのボスポラスを荒れ廻り、私どもの食
物を皆取つてしまひますから、御覽の通り貧乏になつて、始終

ひもじい思ひをしてをります。』

これを聞いた風の神は眞赤になつて立ち上り、
『何をいふピ子ウス、お前は我々二人を知らないか、この脊中の
翼を見たことはないか。』

といひますとピ子ウスは顔をかくして一言も返答ができません
でしたから、風の神はなほも言葉をつぎ、

『お前は悪者だから毎日大鷲にせめられるのは當り前だ。私の姉
さんをどこへやつた、眼をつぶした二人の子供はどうしたか。
さあ私たちにあやまつて、姉さんを元のとほりお后にして悪い
女をおひ出して二人の子供を連れてきたら、お前の罪も許して
やるし、またあの大鷲も退治してくれる、さあどうだピ子ウス！』





それがいやならお前が子供の眼をつぶしたやうに、私たちがお前の眼もつぶしてやるが。』

といひましたのでピ子ウスは大そうあやまり、早速悪い女をおひ出して元のお后をよびかへし、二人の子供をつれてきましたから、ヤソンは薬の草をとつてきて、二人の眼を直してやりました。するとゼーテスにカライスは遠征隊の人たちに向ひ、

『皆さんもお聞きの通り、ピ子ウスが私たちのいふことをきゝましたから、私たちも亦約束通りこれからあの大鷲を退治にまゐります。ついては今まで皆さんと一緒にまゐりましたが、私たちは大鷲の逃げるころへはどこまでもおつかけてゆき、もし捕へることができなければ死んでしまふ覺悟ですから、これで

皆さんにお分れをいたさなければなりません。どうか皆さん身體をお大事に、見事金の羊の皮をとつておかへりになりますやうに願ひます。』

といひましたので、遠征隊の勇士たちも涙を流して別れました。そこで二人は天へかけ上り、大鷲めがけて飛びかゝりました。暫の間は空中の大戦。なにしろ風の神のたゝかひですからそのひどいといつたら、町中が鳴り動いて樹はぬき倒される、家はつぶされる、大きな岩が山の上から吹き飛ばされてくれば、海は一面に泡でもつてまつ白になり、雲の塊が崖下へつき當つてバツと散り砕け、一年中の暴風が一べんにやつてきたやうな有様でした。しかし大鷲はとうとう防ぎきれず、羽をかへして逃げ出しま





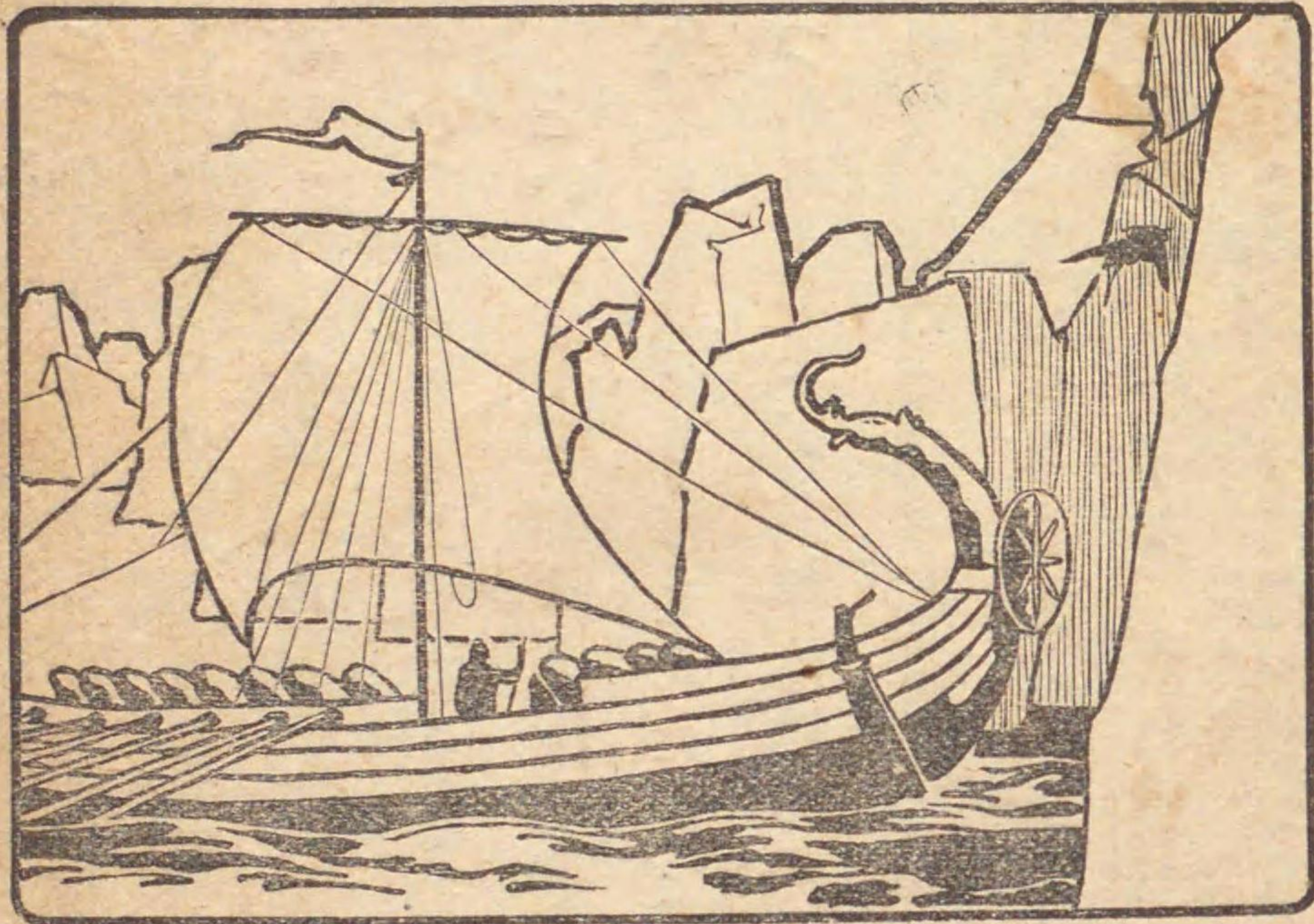
すと、おのれどこまでもといふので、風の神がおつかけてゆきま
したから、暫すると空が晴れて美しい日が當つてきました。
さて二人は終にどうなつたかといへば、すつかり疲れきつて死
んでゐたところを、お天道様がごらんになつてかわいそうに思召
し、キクラデスといふ島へ葬つてやりましたが、お墓の上に一本
の柱がたつてゐて、その柱が風のまにまにどつちへでも動いてゐ
たといふことであります。

(八) 氷の山

アルゴナウトの一隊は、また船に乗つて東の方へゆきました
が、ボスポラス海峡を通り過ぎますと、廣々として果てしもない



大きな海へ出ました。そこは黒海といふところで大昔はエウキシ
ヌスといつた海のことです。こゝはもう昔の人が世界のは
てだの、腐つた海だの、常夜の國だの、地獄だのといつてゐたと
ころで、人間のゆくところではないといつてゐたのであります。
ですから皆もしばらくは楫を置いて、向うの方をながめますと、
見渡すかぎり恐ろしい波ばかりでどこが際だか分かりません。流石
の勇士たちも思はず知らず身震ひをした位でありましたが、やが
てオルホイスがいふには、
『あゝいよいよ私たちは氷の山へやつてきたのだ。そら、向うの
方をごらんさい！ 大きな青色をした山が、いくつも動いてゐる
でせう。』



『これつばかりのことに怖れてはならない。さああの山が離れる隙をねらつて、すばやくあの間をつつさるのだ、しつかりやれ！ヘラの神様がついてゐるぞ！』

といひました。しかしチヒスは齒をくひしぱり天をにらんでゐましたが、その時一羽の青鷺がどこからか飛んできました、船の前をあつちこつち舞ひながら、隙を伺



かういつてゐる中に雲を突くばかりの氷の山が流れてきました、その大きいことはまるで城か塔のやう、そうしてその上からは身を切るばかりの冷たい風が吹きおろして、皆の心を縮ませました。だんだん傍へ近づいてくると、あつちの山やこつちの山がぶつかり合つて、天にとどろくやうな怖ろしい響をしてゐるのが聞えました。そうしてそのぶつかる度に、海の水が五六丈も高く噴き上つて、丁度大きな噴水をしかけたやうであります。またその崖のあたりは寒い風が鳴り響いて、まるで大きな化物が唸つてくるやうでありました。

この勢に氣をのまれて皆沈んでをりますと、オルホイスは立ち上つて舵取のチヒスに向ひ、



つて山と山との間を通りぬけやうとする様子でありました。これを見たチヒスは大きな聲で、

『ヘラの神様が案内をつけて下すつたぞ！さああの鳥のあとへついて突切るのだ！』

といひました。するとその鷲はうまい隙間をみつけたと見えて矢よりも速くとびこんだかと思ふと、二つの氷の山はづしんとぶつかりましたが、鷲は尾の先の小さな毛を一筋はさまれたばかりで、無事に通り越しました。すると氷の山は今ぶつかつた勢で兩方へ跳ね反りましたから、そら今だぞとかけこゑをして大きな化物の口のやうな、氷の崖下へ向つて力一杯漕ぎだしたが、楫はまるで楊のやうに曲り額からは玉の汗が流れました。ふりかへつ

て見るひまもなくもう二つの山がぶつかり合つて、海はまるで瀧のやうにとび上り、それが夕立のやうに頭の上へ降りかゝりました。

危い思をしてやつとのことで氷の山の間をぬけ、アジアの海岸についてオルフといふ河の口へつきました。しかし悲しいことにはこゝでもつて、また二人の勇士をなくなしました。それは舵取のチヒスと漕手のイドモンとで、イドモンは悪い病氣にかゝつて死に、チヒスは大きな猪にくひ殺されたのでした。しかしイダスといふ人がその猪を殺してチヒスの仇を討ち、それから天文学者のアンカイオスがチヒスに代つて舵取になり、また東の方へと漕いでゆきました。



(九) お天道様の子

シノープの岬やアマゾンの町を通り越して、だんだん東の方へゆきますと、遙向うの山の上に竈の火が眞赤に映つて、ごうごうといふ鞆の音や、トンテンカントンテンカンといふ鐵槌の響が聞えしました。そこは軍の神アレエスの槍刀を造へるところで、大勢の鍛冶屋が住んでゐるところであります。ずつと東の方を眺めると水と空との境に、雲か山かと思はれるものが見えましたが、それはもう世界一のコウカサス山なので、だんだん近くなると雪の冠が雲の上できらきら光り、裾の方はコルヒスの森の中に隠れてをりました。一隊はもう占めたものだと大喜びをしてそのコウカ

サス山を目的に、毎日漕いでゆきますとやがて三日ばかりたつて、もうアイエーテス王のお城の屋根が見えました。何しろこのアイエーテスといふ王様はお天道様のお子様ですから、そのお城も大そう立派で、屋根の瓦はすつかり金で葺いてありますから、それが日に當つてピカピカと輝き、そのまぶしいことといつたら目もつぶれるかと思ふほどです。さあいよいよ目指す所へ漕ぎつけたといふので、皆の喜びは一通りではありません。舵取のアンカイオスがいふには、

『さあとうとうついたぞーアイエーテスの金の城も見えれば、恐ろしい毒の森も見える。だが金の羊の皮はどこいらにあるか分らない、それをとり出すまでにはまた一難儀しなければなるま

い。』

しかしヤソンは、もう嬉しくつて嬉しくつて胸が一杯になり、『なあにわけはないさ！私が獨でこれからアイエーテスの所へいつて甘く談判してくる、その方が大勢でおしかけるよりは餘程いいからね。』

といひましたが勇氣盛のミニエル男兒、何でだまつて後へ残られませう？皆腕節をさすつてエツサエツサと河の中へ漕いでゆきました。

さうとは知らぬアイエーテス王、昨夜の夢に光つた星が自分の娘のメデイヤの唇に落ちたところ、メデイヤは嬉しさうにそれを取り、河の縁までもつていつて水の中へ捨てますと、渦を巻いて

ある河の水がエウキシヌスの海の方へもつていつてしまひましたアイエーテスはこの夢が氣になつて堪りません、何か悪いことの兆でもあらうかと、家來にいひつけて馬車を仕立て、河の神へお詣りにゆきました。馬車の中には娘のメデイヤとカルキオブの二人がついてゆきましたが、このカルキオブといふ女は前に話した通りフリクソスのお嫁さんで、またメデイヤといふ女は美しい魔法使であります。其外馬車の後ろには大勢の家來や兵隊どもが、行列そろへてついできました。

河の方からはアルゴナウトの遠征隊、岸の上からはアイエーテスの行列、双方近づいてお互に面を見合はせました。アイエーテスのなりといへば立派な金襴の上衣を着て、冠は月のやうに輝



き、寶石入りの笏は星のやうに光つてゐました。王様は怖ろしい顔附をしてデロデロとアルゴの中を見廻はしましたが、やがて大きなこゑを出し、

『こりや貴様達は何者だ。一體何をしにこゝへ来た？この國を取る積りかそれともコルヒスの人間を盗む心か。しかし氣の毒だがこの國の人は戦争なら決して負けないぞ。』

かう頭から叱りつけられたので、ミニエルの勇士たちは皆黙つて何ともいふ者はありませんでした。しかしヤソンはヘラの神様ががついてゐるぞと心の中で氣を勵し、アイエーテスより大きなこゑで、

『いや王様、我々は何もあなたの國を取りにきたのでもなし、ま

た人間を盗んでゆかうといふのでもありません。實は私の叔父でミニエル王のペリヤスといふ者と約束をして、こちらにある金の羊の皮を頂きにきたのです。またこゝにゐる人たちは皆私の仲間で、いづれも神様の子や勇士の子なのですから、よし戦争したつて決して負ける氣遣ひはない。しかし王様、そんなことをしないでおとなしく我々をお客にした方が、兩方のために都合がいゝでせう。』

これを聞いたアイエーテスは、火のやうになつて怒りましたが、すぐと顔色をなほし却てやさしいこゑで、

『むゝさういふ譯か、だが金の羊の皮をとりたい爲めにコルヒス人と戦争すれば、お前たちも大勢死ななければならぬぞ。だ

がなんでもかんでも腕づくでとるといふなら、お前の方は人数は少し、私の方は大勢あるからお前達の死骸をその船へ積み上げるばかりさ。そんなことをするよりかお前たちの中で誰か一人、一番いゝ人をよりぬいて、其人が私のいふことを皆仕遂げたら、その時こそは金の羊の皮を御ほうびとしてお前たちにくれてやらう。』

かういつてアイエーテスは靜に馬車をかへし、御殿の方へかへりました。後に残つた勇士たちは誰にしようかと相談しましたが、皆ヘラクレスのことを思ひ出し、あの大力の人がゐたならば、千萬人の敵だつて何でもないと思ひました。

(十) 恐ろしい森

カルキオブは夫のフリクソスのことを思ひ出し、メデイヤはヤソンの勇ましい様子を慕ひながら、どうかしてあの人たちを扶け、金の羊の皮を取らせてやりたいものだ、二人でいろいろ心配してゐました。其晩カルキオブは自分の子を連れてメデイヤと一緒に河へゆき、子供にいひつけてヤソンを呼んでこさせました。

外の人は皆ねてしまひましたが、ヤソンは獨岸へ上つて、どうして羊の皮を取らうかと一心に考へてをりますと、蘆の間から一人の子供が出てきて、

『私はフリクソスの息子ですが、母さんのカルキオブが金の羊のことについてあなたにあひたいといつて、あちらに待つてゐますから、どうか一緒に来て下さい。』
 といひましたから、ヤソンはその小児の後について、蘆をくぐつてゆきますと、向うに二人の女が立つてゐました。カルキオブはヤソンを見ると泣きながら、

カ『もしヤソンさん、あなたはどうか國へ歸つて下さいまし、さうしないときつと命が危うございますから。』

ヤ『これはカルキオブさん、何で私がをめをめと家へ歸られませう。長い間無駄に船乗りをしたのでは、國の人たちに合はせる顔もありません。』

二人はいろいろとすゝめてみましたが、どうしてもヤソンはききませんでした。かち、メデイヤはヤソンに向ひ、

『あなたは金の羊の皮を取るのには、どんなに怖ろしい目にあはなければならぬか知ますまい。それを取るにはまづ黄銅の蹄が生えてゐて、息をする度に火事の様な火を吹き出す、恐ろしい大きな牡牛を二匹馴らして、夕方までにアレースの野廿段ばかり耕し、そこへ蝮蛇の齒を播かなければなりません。さうするとその齒は皆鎧をきた軍人になつて、八方からきつてかゝるのです。それで大抵な人は殺されてしまひますが、もし萬一助かつたとしたところで、羊の皮はまだとれません。あの金の羊の皮は恐ろしい森の中にあるので、一度入つたらどんな人でも



毒どくに中あたつて、二度と生きては歸かへられないのです。おまけに其森の中なかには、頭あたまの三つもある化物けものが見張みはりをしてゐて、めつかつたが最後さいごすぐとつて食くはれるのです。また甘うまくその化物けものにめつからないとしたところで、その皮かはは大きな龍りゅうが番ばんをしてゐるので、その太ふとさはといつたら千年ねんもたつた松まつの木きよりも大おほきいのです。このまた龍りゅうにめつければ、一口ひとくちに吞のまれてしまひますが、羊ひつじの皮かはを取とらうとするには、どうしてもその恐おそしい龍りゅうの脊せ中なかを五六町ちやうばかり渡わたつてゆかなければならないのです。』

ヤソンはこれを聞いて高たかく笑わらひ、

『全體ぜんたいこゝへ羊ひつじの皮かはを隠かくしておくといふことは、誠まことによくないことだから、私わたしはどんなことがあらうともとれるだけはやらな

ければならない。私わたしはあしたの夕方ゆふがたまでに是非ぜいひ取りに行くゆつもりだから、もう命いのちはないものとあきらめてゐる。』

メデイヤは震ふるへながら、

『私わたしが案内あんないしなければとても人間じんげんにはゆかれませんよ。周まはりには三丈じやうもある高たかい堀ほりがあつて、その下したにはすぐ深ふかい川かはがとりまいてゐるので、門もんはといへば金きんの軍人ぐんじんが番ばんをしてゐるし、また門もんの中なかにもブリモといふ頭あたまの三つもある化物けものがゐて、手てに焚たいまつ松まつをふりまはしながら、方々はうくを見みまはしてゐるのです。それからまた狂犬やまいぬが大勢おほぜいそこいら中ちゆうにうろついてゐるのですから、とても人間じんげんにはよりつかれません。唯ただ私わたしだけはその恐おそろしいブリモといふ化物けものの、説教せつきやう師しなのですからそれで傍そばへゆかれるので



す。』

ヤ『しかしメデイヤさん、いくら高いといつても登つて登られな
い塀はありますまい。またいくら茂つてゐるといつても、這つ
て這はれない森はありますまい。龍だらうが化物だらうが、お
呪ひを使つて降参させればいゝでせう。あなたは魔法使で大そ
うお上手ぢやありませんか、あなたさへ助けて下されば私はき
つと羊の皮を取つて見せます！』

メ『ではヤソンさん！それほどまでにあなたが一生けんめいにな
るなら、及ばずながら私か助太刀をしてあげませう。今いゝも
のをあげますからちよつとまつておいでなさい。』

(十一) 不思議の油

メデイヤはポケットの裡から一瓶の薬をとり出し、

『これは私がコウカサス山の雪の上にある、氷の花からこしらへ
た不思議の油なのです。これをあなたの中からたへ塗れば七人力
の力が出るし、楯へぬれば火にも焼けずどんな疵さへもつきま
せん。またこれを兜へぬつて蝮蛇の齒をまいた時、鎧をきた軍
人がとびかゝつたならば、すぐとその兜を畠の中へ棄てるので
す。さうすればひとりでに兜がわけて、皆埋まつてしまひま
す。けれどもヤソンさん、この油のきゝめはたつた一日ですか
ら、そのつもりでお使ひなさい。』

ヤソンは天へも上る心でいくら喜んだか知れませんが、カルキオ
 プやメデイヤに別れてすぐと皆のところへかへつてきました。
 ヤソンからわけを聞いた遠征隊は大喜び、鬼の首いや羊の皮を
 とつた氣で夜明前から河へゆき、ヤソンはからだをよく洗つた
 上、頭あたまの先さきから足あしの先さきまで油あぶらをぬり、楯たてから、兜かぶとから、槍やりまでも
 すつかりぬりつけてしまひましたから、そこで皆にためさして見
 ました。まづ槍やりを曲まげようとすれば鐵てつの棒ぼうのやうであつとも曲まら
 ず、刀かたなをぬいて斬きりつければ却かへつて片々こたぐにはねかへり、槍やりでもつ
 て楯たてをつけば先さきが鉛なまりのやうに曲まつてしまひ、ヤソンのからだは
 しても引ひつ張はつても一寸すんも動うごきません。中なかでもポリデウケスとい
 ふ牛うしをはり殺ころす位くらゐ力ちからのある人ひとが、拳固けんこを固かためてなぐつて見たが、

ヤソンはにつこり笑わらふばかりでありました。皆みんなはあんまり嬉うれしく
 つて躍おどりまはつてゐる中うちに、もうお天道てんとう様が上のぼり始はじめそろそろ夜
 が明あけてきましたから、アイエーテスの御殿ごてんへおしかけ、お約束やくそく
 の通りチャムピオンを一人ひとりよりぬいてきましたから、どうか蝮蛇まむし
 の齒はを下くださいといひますと、アイエーテスは多分たぶん昨夜ゆうべあたりもう
 逃にげてかへつたらうと思おもつてゐたところでしたから、これは大變たいへん
 とびつくりしましたが、今更いまさらよすわけにはゆきません、仕方しかたがな
 しに蝮蛇まむしの齒はをやりました、そこで王様わうさまは町中まちぢやうへおふれを出だし、
 今日けふはミニエルの弱蟲よわむしたちに赤耻あかはぢをかゝしてやる積つもりだから、皆みんな
 見物けんぶつに出でかけろといひました。すると廣々ひろくとしたアレースの野のも
 忽たちまち人間の山じんげんができた位くらゐ、向むかうの方ほうにはアイエーテスが立派りっぱな椅い

子によりかゝつて、兩側には鎧甲で身を固めた兵隊が、何千萬人あるが分らないほどつき従ひ、此方の方にはコルヒスの人たちが、男も女も年寄も小兒も、雲か霞のやうに集つてこの日の勝負を見にきてゐます。その眞中にゐるアルゴナウトの一隊は、ほんの一つかみ位にしか見えません。

その中にはカルキオブもあればその子供もゐる、中にもメデイヤは震へながら、どうかヤソンに勝たしてやりたいと思つて、口の中で一生けんめいお呪ひを唱へてゐましたが、王様の耳には聞えませんでした。

(十二) 魔法くらべ

ヤソンはまん中へ進み出て、

『さあ約束通り火の牛でも何でももつてこい。』

といひますと、アイエーテスは今に見ろといはないばかりに高ぶつて、家來にいひつけ門の扉をおしあけさせました。すると見るから恐ろしい大きな牛が黄銅の蹄をひゞかして鼻の孔からはばうぼうと火の息を吹き出し、角をふりたて、ヤソンに突きかゝりました。しかしヤソンのからだは一寸も動かず、半本の髪の毛さへ焼けませんでした。この時メデイヤは牛の面をちつと睨めてお呪ひを唱へますと、牛は急に體がすくんで思ふ通りに働けませんでしたから、ヤソンはますます勢がつき、二本の角をしつかりつかんで暫角力をとつてゐましたが、とうとうづしんと音をさせ

て見事に牛を投げました。この勢に恐れて牛は小さくなり、よくヤソンのいふことをきいて廣々とした畠を皆うなつてしまひました。これを見たミニエルの遠征隊は、手を拍ち聲をあげて喜びさわぎました。アイエーテスはくやしがつて齒ぎしりをし、大勢の見物人はあつけにとられてしまひました。それからヤソンは蝮蛇の齒をとりばらばら播いてゆきますと、やがて畠の畝がむくむくと高くなつて、あつちからもこつちからも鎧をきた怖い兵隊がとび出し、忽ちの中に何千人といふ人数になつたかと思ふと、皆きらきらする刀を引き抜き、ヤソンを目がけて斬つてかゝりました。遠征隊の人たちはこれは大變といつて顔色をかへ、どうなることかと冷汗をかいて見てゐますと、アイエーテスはそれ見た

ことかと笑ひながら、

『アハ、どうだ。なんとおれはえらいものだらう。身の周りに兵隊がなければ地面からあゝいふやうに幾人でも出せるからな。』といひますとお傍の家來は勿論のこと、大勢の見物人がさまを見ろといはないばかりに笑ひました。しかしヤソンはちつとも恐れず、かねてメデイヤに教はつた通り、兜をとつて投げつけますと、蝮蛇の兵たいどもは俄に馬鹿になつてお互に喧嘩を初めました。

○『おや、おれをぶつたな。』

△『なに、貴様が先へぶつたんだ。』

×『こら、貴様はヤソンだな。』



口『なに、お前こそヤソンのくせに。』

あつちでもこつちでも同志打が始まつて、打つやら、蹴るやら、引かくやら、ほんとうのヤソンはそつちのけにして、お互に斬り合ひをはじめましたから、見てゐる中に皆傷を受けて倒れてしまひました。すると不思議にも畠の敵がパクリと口をあいて、その死骸を皆すい込んでしまひ、忽ちの中に青い草が一面に生へてしまひました。すると遠征隊は總立ちになり躍り狂つて喜びましたが、ヤソンはアイエーテスの前へ出て、

『さあ日が暮れない中に羊の皮のある所へ案内しろ。』

といひましたが、アイエーテスは顔色を眞青にして震へながら、お傍にゐる役人たちと相談をして、どうしたらよからうとい

つてゐる中に、もうそろそろ燈がつく時刻になりましたから、今夜は一先づ家へかへりあしたまた會はうといつて別れました。

(十三) 大蛇の脊渡り

アルゴの中では遠征隊の人たちが、今日の勝を祝ふ大さわぎ、中にもオルホイスは皆に向ひ、

『どうだこれから皆一緒に森へ出かけて、なんでもかんでも羊の皮をとつてこようぢやないか。』

するとイダスといふ氣の早い人が、

『それぢや一番初めにゆく人を籤できめて、其人が龍にのまれてゐる隙に他の者が斬り殺してしまへば、羊の皮はわけなくとれ



るぢやないか。』

かういつていろいろ評議をしてをりますとメデイヤが入つてきて、いきなり泣き出しましたから皆はびつくりして言葉も出さず、どうしたことかと驚いてゐますとやがてメデイは涙をふきながら、

『あゝもう大變なことになつてしまひました。もうこれで私も死ななければなりません、今日私がお呪ひをして皆さんを助けたことを、お父さんにめつかりましたから、もう私の命はありません。ですから皆さんはこれで國へお歸りになり、このメデイヤのためにお経でもあげて下さいまし。』

すると皆は、

『なにあなたが死ぬのなら、私たちも一緒に死ぬ。たとへどんな苦しい目にあつても羊の皮をとらずに、なんで國へ歸られませう。』

するとヤソンはメデイヤの傍へより、

『これこれ、そんな弱いことをいつては困る。お父さんにめつかつたからつて何もおめおめと殺されてしまふには當らない。そんなことをせずと早く羊の皮を取れるやうに手傳つてくれ、さうしてそれをもつて私たちと一緒に國へ歸り、私のお后になつてイオルコスを支配してくれ、ばい、ぢやないか。』

さうださうだといつて皆はメデイヤをお后にするといふことを約束しました。メデイヤは嬉しいことも嬉しいし、さうかといつ



てまた姉妹や住みなれた土地を離れるのが悲しさに、暫は顔に手を當て、泣いてゐましたが、やがてまたヤソンに向ひ、

『そんならヤソンさん、私はあなたの仰せに従ふとさせう、では今夜森の傍の河の縁まで船を漕いでおいでなさい。さうして誰か一人強い人をお連れなさい。それぢやまたあの塀の下でお目にかゝりませう。』

といひますとその言葉がまだ終らないのに、私が行かう！私も！私も！といつて皆行きたがりしましたが、メデイヤはそれを静めて、

『まあまあお待ちなさい。それではかうしませう、オルホイスさんに琴をもつて一緒にきてもらひませう。あなたの歌ならどんなものでも迷つてしまひますから。』

するとオルホイスは大喜びでにこにこしてゐましたが、メデイヤはなぜこの人をよりぬいたかといふと、大昔は詩人だの歌の上手だのといふものは、それと共にまた大膽な強い人なのでしたからです。

やがて晩になりましたからヤソンはオルホイスと一緒に、塀の下までゆきますと、約束通りメデイヤが一匹の羊の兒をつれてきました。が、ヤソンにいひつけて門の傍へ穴を掘らせ、羊の兒を殺してその中へ入れ、不思議の草と蜂の蜜を上へふりかけました。すると眞赤な火と一緒にブリモといふ化物の前へ跳び上りました。が、狂犬どもがワンワン吠えました。このブリモといふ化物は頭



が三つもあるので、一つは馬、一つは犬、もう一つは蛇です、三人はこれを見て怖ろしさに震へ上りましたが、羊の児の肉を見るとブリモは狂犬と一緒に飛んでいつて、皆食べてしまひました。丁度其時門の門がはづれて、扉があいてゐましたから三人は大急ぎで毒の森へ入り、大きな山毛の木の間を通りましたが、夜のやうに眞暗な上、なんともいへないやな嗅がして、今にも息がつかまるかと思ひましたが、遙向うの一番大きな山毛の木のでつぺんに、金の羊の皮が引かゝつてピカピカとランプのやうに暗を照らしてをりました。

ヤソンはもう嬉しさに夢中になつて、いきなり飛び上らうとしますとメデイヤはこれをとめて、木の根の方を指さしました。す

るとそこには松の木やうな大きな龍が、根の間にとぐるを巻いてゐましたが、脊中には黄銅や金の鱗が生へてゐて、尾といつたら半分だけは見えますが、あとの半分は遠くの方へ續いてゐてどこまであるか分りません。龍は三人を見ると頭をもちあげ、電のやうな舌を出して睨みましたが、やがて大火事のやうに唸りますと、森の中の木の葉はふるぶると震へ出し、川の水は波が立つてアイエーテスの御殿はいふまでもなく、町中へひびき渡つて地震と間違へた者もありました。しかしメデイヤは傍へよつてお呪ひを唱へますと、龍はさも柔しきうに首を延ばし、メデイヤの手をなめながらなんか食物をねだるやうな風でした。そこでメデイヤはオルホイスに合圖をしますと、オルホイスは縦琴をとつていゝ



聲でねんねこ歌を歌ひました。さうすると木の葉はもとの通り静
 になり、川の水はおだやかに流れ、龍は首を垂れて小兒のやうに
 すやすやと眠りました。さあ今だぞとヤソンは勇氣をふるひ、大
 蛇の脊中をとんとんと渡りながらやがて大きな山毛の木から、金
 の羊の皮をとつて三人ともに逃げ出しました。

船の中には待ちかねた遠征隊、毒に中つたか龍に呑まれたかと
 心配してをりますと、やがてヤソンが羊の皮をかゝへて先に立
 ち、つゞいてオルホイス、メデイヤも、無事に歸つてきましたか
 ら、あんまり嬉しくつて口もきかれませんでした。するとヤソン
 はアルゴに向ひ、

『さあいよいよ歸るんだ。またなつかしいペリオンへかへられる

ぞ。

といつてめつからな中うちに早く行ゆかうと、皆精一杯みなせいはいの力ちからを出だし、エツサエツサと漕こぎ出だしますと、オルホイスは琴ことをとつて凱かち旋まわりの歌うたを歌うたひましたから、皆みなの心こころは飛とび立たつばかり、楫かいを揃そろへて威勢かせいよく、西にしへ向むかつて漕こぎ出だしました。

(十四) 不知しらの海うみ

アイエーテスはこれを知しり、大勢おほせいの家來けらいを船ふねにのり込こませ、艦かん隊たいを造つくつておつかけてきました、遠征隊えんせいたい中にリンケウスといつて千里せんりも先さきの物ものを見みる人ひとがゐりましたが、忽たちまちアイエーテスの船ふねを見みつけ出だし、

『やあ向むかうの方ほうから大たいさうな船ふねがやつてきた、まるで鷗かもめが集あつつてくるやうだ。あゝ何なんだ？ あれはアイエーテスの船ふねだ！ これは大變たいへんおつかけてきたんだぞ！』
といつてゐる中うちにだんだん近ちかくなつてきましたから、どうしよしようかと思おもつて皆困みなこまつてをりますと、メデイヤは心こころを定さだめて一いっ緒しょにつれてきた弟おとうとのアシルトスを刺さし殺ころし、海うみの中なかへ投なげ込こみましました。さうして氣きでもちがつたかと、驚おどろいてみてゐる皆みなに向むかひ、
『さあかうしておけばお父とうさんのアイエーテスがおつかけてきた時とき、自じ分の兒この死骸がいをみてこれはすてゝはおけないといつて拾ひろひ上げ、ぐづくづしてゐるその隙すきに遠とほく逃にげてしまへばいゝでせう。』



遠征隊の人たちは酷いことをするとは思ひましたが、危い場合のことですからメデイヤのいふまゝに、波の上の死骸をうつちやつてどんどん西へ逃げ出しました。アイエーテスはそれとも知らずおつかけて来て見ますと、一人の死骸が浮いてゐるので誰だらうかとよく見ると、自分の小兒のアブシルトスですから、急いで船へ拾ひあげ自分の家の方へ引きかへし、家來たちにいひつけていふには、

『お前たちはすぐ後をおつかけてきつとメデイヤを捕へてこい。もし空手でかへつてこようものならひどいお刑にあはせるぞ。』といひました。

アルゴナウトの一隊はやつと遠く逃げのびて、まあよかつたと



思ふ間もなく、怖ろしい暴風が吹いてきて毎日毎日泡と霧の中を流されるばかりで、夜たか晝間たかちつとも分りませんから、どこをどう吹き流されたのだから知れませんでした。終にはとうとう浅瀬へのりあげ泥と砂の中へ挟まつて、頭から波をかぶりましたから生きてゐる心もありません。ヤソンは驚いて舳へまはり櫂の枝に伺ひますと、

『こんなめにあふのは當り前だ。お前たちは罪もない人を殺してこの船を血で汚したから、ゼウスの神様が太そう怒り、それでこんな暴風を起したのだ。』

すると皆はかういふ苦しめにあふのも、全くメデイヤの故だから其の罪を滅ぼすために、海の中へ投げ込まうといひました

が、櫂の枝がまたいふには、

『いやいや、お前たちが成敗せずとも神様が讐をとつて下さる。

それにはメデイヤがキルケといふ姉さんのある島へ案内しなればならない。さうすればキルケが皆の罪を清めてくれる、し

かしキルケのゐる所はこれからずつと西のはづれだから、また

長い間船乗りをしなければなるまい。』

其中に海が穏やかになり、またお天道様が顔を出しましたから、遠征隊は船をおし出しメデイヤの案内に従つて、不知の海へこぎ出しました。

コウカサスの裾を廻つて船はだんだん北の方へと行きました。

さうしてとうとうマイオチツドレーキといふ、今のアゾブ海へ入

りそこから今のドン河を溯つて、一つ目小僧のゐる國や、人喰鬼の住んでゐる恐ろしい國々を通りすぎて行きました。もう河も盡きてしまひ船が動かなくなりましたから、仕方がなしに陸の上を綱をつけて引張りながら、長い間通りましたがしまひにはクロニア海（今のバルチツク海）へ出ました。それからまた波の上を毎日々々漕ぎ歩きましたが、其中に海の際へついてしまひ、もうアルゴが動かなくなりましたから、流石に強い遠征隊も皆力を落してしまひ、腕はくたびれるお腹はへる、たゞもう死ぬのを待つばかりでした。しかし舵取のアンカイオスはこんなことで弱つては仕方がないと、皆の威勢をつけながらまた船を引張つて陸の上へ上りました。

(十五) 魔女が島

だんだんゆきますと、もう夢の國だの、世界の門だのといふ所まできました。或時のことアンカイオスは高い所へ上つて方々見てゐましたが、やがておりてきて皆にいふには、

『もう少し我慢し給へ、もうそんなに苦しいことはないよ、今山の上へ上つて見てきたが、なんだか大洋の波の音が聞えるやうだから、帆をあげて一番威勢よく漕き出さうぢやないか。』

すると舳に祭つてあつた例の櫂の枝がいふには、
『あゝあゝ、メデイヤのお蔭でこんな苦しい思をする位なら、いつそエウキシヌスの海へ沈んでしまつた方が餘程よかつた。しか

しこれからアイエル子の近所へゆくと、また一つ怖ろしいめに逢はなければなるまい。けれどもそこを通つて南へ南へと漕いてゆかないと、もうもう果しもない大西洋へ迷ひ込んでしまふ。』

このアイエル子といふのは、取りも直さず今の英吉利のことです。さいいます。さて一隊は櫂の枝におみきを供へ、また海岸から漕き出しましたが、成程アイエル子を通らうとする時、酷い大風が吹いてきて二十日の間といふものは、お天道様も見えなければ星も見えず、波から波へと吹き飛ばされて西も東も分らなくなつてしまひました。

アンカイオスは一生けんめい、皆の心を引き立て、根かぎり働きますと、やがて向うの方に一つの島が見えました。それはウエ

ストの島といつて今のアゾレス島のことでございます。こゝにはキルケといふ女が住んでゐるのですが、メデイヤはもう氣がついてあれは姉さんのゐる島だといひました。ヤソンは皆と一緒に陸へ上りキルケのところへ尋ねてゆきましたが、其容姿といつたら髪の毛から顔から着物まで、まるで火のやうに光つてゐましたから皆怖がつて震へました。キルケはメデイヤを見て大そう叱りますと、遠征隊の人たちはどうか皆の罪を清めて下さいといつて願ひましたが、キルケは承知してくれませんが、いつまでもこゝにゐないで早くマリヤの所へゆき、マリヤに罪を許してもらへといつて遠征隊をかへしました。

そこで皆はアゾレスの島を後にして東の方へ漕ぎ出しました

が、イベリヤの岸についてタルテスの國を通り、今のヂブラルタルの海峡を通つて地中海へ乗り出し、サルヂニヤの海をだんだん漕いでゆきますと、また向うの方に一つの島が見えました。それは魔女が島といふ島でその奇麗な景色といつたら、山は紫色に木が茂つてゐて、その間には雲か霞のやうに花が咲きつゞいて、岸には雪のやうな白い泡が、波のうちよせるたんびに散り亂れてゐるので、繪にもかけないやうないゝ景色でした。こゝはどんな人が住んでゐる島かといふと、サイレンといふ美しい魔女のあるところで、そのまたサイレンといふ魔女は笛を吹くことが大そう上手で、いつでも海を乗りあるく人が一度この笛を聞いたら、面白くつて面白くつて歸ることなんかすつかり忘れてしまひ、知ら

ず知らずその島へ上るといつのまにかもう命がなくなり、大勢のサイレンたちに皆食はれてしまふのであります。

○(十六) 歌くらべ

メデイヤは早くも笛の音を聞きつけて、

『さあ皆さん、こゝは魔女が島でございますから、氣をつけなさいといけません。サイレンの笛を聞いたらもう命はないものでございませぬ、けれども是非あすこを通りぬけなければなりませんから、よく用心しておいでなさい。』

するとオルホイスは立ち上つて力みかへり、

『よし！今こそおれの腕をふるふときだ。音に聞えたコルヒスの

大蛇を降参させたこの歌で、一番あのサイレンどもと勝負をしてやらう！』

琴をとつて舳に立ち上り、魔女が島をきつと睨んで精一杯の力を込め、不思議の歌を始めました。

夕陽に赤く色彩られた岩の下で、眞黄色に咲き擴がつた花の上に横はり、三人の美しい魔女が琴をとつて銀の鐸をふるやうない聲をたて、夢のやうに歌ひ出しますと、金色にさざ波立つた海を超えて、その美しい響が波のやうに傳はつてゆきます。夕方の天地は寂として皆魔女の歌を聴いてゐるかと思はれる程、鷗はその翼を息めて岩の上に頭を垂れ、魚は靜に脊を表はして波の上に浮び、風さへそよそよとして音も立てず、空には金の羊かと思は



れるやうな雲が立ち止つてゐる。流石に用心をした遠征隊もいつしかオルホイスの琴はそつちのけにして、メデイヤの言葉も忘れてしまひ、すつかりサイレンの歌に氣を取られて、持つてゐた楫の落ちるのも知らず、頭はだんだんと下つてまるで心持のいゝ夢に酔つてゐるやうな具合、身體は藻脱のからになつて勇氣もなければ名譽も思はず、あゝもう歸るのは嫌になつたの、方々漕ぎ歩いて何になるの、このまゝ死んでしまひたいのと、まるで弱虫のやうなをいつてちつとも男らしい威勢はありませんでした。中にもブウテスといふ人なんかは、早くも海の中へとびこんで岸の方へ泳ぎながら、サイレン様サイレン様、もう命なんかはいりませんから、どうか一緒にいて下さいなんていひながら、夢中に

なつて泳いでゆきました。これを見てメデイヤは聲をはりあげ、『オルホイスさん！さあもつとしつかり歌つて下さい、この意氣地なしどもの氣を引立てなければ、もう二度と再びヘラスの山は見られませんか！』

おのれサイレン！このオルホイスが負けてたまるものかと、やつきとなつて琴をとり直し、強く絃を拂ひながら、山もさけるとはかり聲をふり絞つて、有りつたけの勇氣を揮ひ、百萬の鬼をも叱り飛ばすやうな威勢を込めて、一生けんめいに歌ひますと、其聲は勝軍の喇叭のやうにひびき渡つて、方々の山々は雷のやうに木精を傳へ、海の水は俄に大波を起して泡を飛ばし、崖の上では岩でも木でもぶるぶると震へました。オルホイスは獅子の猛り立つ





たやうな勢で、ますます勇ましい聲をはり上げ、ペルセウスといふ大勇士の歌を歌つて、海を越え山を越え死ぬやうな難儀をおし通したことから、一目睨まれれば石になるといふ恐ろしい化物を退治したこと、終には日出度かちどきをあげて國へかへり、星の冠をかぶりながら神様と一緒にオリムプスの山に住んで、世界中にえらい名譽をとゞろかしたことを歌ひました。

するとサイレンも負けない氣になつて兩方とも歌ひつこをしましたが、根が上手なオルホイスそれが一生けんめいになつたのですから、忽ちサイレンの歌をおしつぶして死にかゝつた遠征隊を生きかへしました。さうして皆はまた楫を取りオルホイスの勇ましい歌をきゝながら、魔女が島を後にして恐ろしい海峡を通り過

ぎました。さてあのブウテスはやつと向う岸へ泳ぎつきましましたが、サイレンの歌に酔つてしまつて何もかもすつかり忘れ、恐ろしい魔女の餌食になつた人たちの、骨の上に倒れてゐました。するとサイレンは驚のやうな爪をむき出し、甘い得物がかゝつたといはないばかりに、ブウテスの方へ歩いてきました。其時アフロヂテといふ神様がこれを見てかわいさうに思ひ、ねてゐるまゝブウテスをかゝへてリリバイヤムの山の上へ連れてきました。さうしてブウテスはいつまでもその山でねてゐたといふことです。

(十七) ろくろつ首

魔女が島の危い目を逃れてシ、リイ島の方へきました。この





三角な島の下にはエンケラドスといふ地震の神様が住んでゐて、夜晝唸つてをりますが、一度怒らうものならそれこそ大變！エトナ山といふ山のてつぺんから怖ろしい火を噴き出して、思ふさま暴れるのです。またそこにはカリブヂスといふ大きな化物がゐて、海の底で渦巻をこしらへ、上を通る者は船でも魚でも皆巻き込んで食べてしまひます。

遠征隊は用心をして通りましたが、海峡の側の方に大きな岩がつき立つてゐて、そのてつぺんは雲の中へ入つてゐます。さうしてその岩は誰れか磨いたやうに、ピカピカと光つてゐてなかなか登ることなんかできません。オルホイスは遠くからこれを見て、

『さあ大變！あすこはサイラのろくろつ首が住んでゐる所だ。頭が六つあつて長い首を延しながら、岩の上から海を通るものを眺め、生きてゐるものと見ると皆とつて食つてしまふ。私たちがヘラやゼウスの神様に嫌はれたし、またこの船は罰が當つてけがれてゐるから、もう誰も助けてくれるものがない。こりや死ななければならぬのかなあ。』

といひました。皆もこれには困つてしまひ、ゆくにもゆかれず歸ることはいやだし、どうしたらよからうかと思つてゐますと、忽ち海の水が大波を起してテチスといふ神様が出てきました。これは遠征隊の一人ペレウスの妻でありますから皆大そう喜びました。するとテチスは女の家來を大勢引きつれて、船の先へ立つや





ら側へつくやら、後ろから推すやらしてお神輿様でもかつぐやうに、ワツシヨイワツシヨイと囃しながらずんずん前を通りました。サイラの化物はこれを見てするするとその首を延ばし、一口にとつてたべようとしみますと、あべこべにその頭をひつばたかれましたから、泣きながら首をひつこめてしまひました。テチスはもう大丈夫といつて龍宮へかへり、アルゴナウトの遠征隊はまたやつと安心して漕ぎ出しました。

(十八) 敵の中

幾日かたちますと向うの方に高い島が見えて、そのまたうしろに大きな山國が見えました。だんだん近く漕いでゆきますと、お

寺だの、庭だの、お城だのが崖の上に立つてゐて、周り中には立派な港がいくつもありました。アンカイオスはこれを見て、

『これは驚いた、こゝはコルキラかもしれない、この島はもと野蠻人ばかりゐたのだが、どうしてまあこんな立派なところになつたらう。』

どんな所だか様子を見てきようぢやないかといつて、港の中へ入つてゆきました。するとそこにはアルゴよりも大きな黒い船がいくつもいくつも岸へ引き上げてあります。さうして大きな町の中にはピカピカ光つてゐる眞鍮の屋根が並んでゐるし、高い大理石の塀がぐるつと取り巻いてゐます。また街道には大勢の人があつちこつちへ往來して商賣に忙しい様子でした。遠征隊の人たち



は珍らしさうに、

『僕等が初めてイオルコスを出だした時には、豪氣に立派な人間だと思つたが、今この町へきてみれば何だか自分たちがみすほらしくつて、まるで蜂の前へ出た蟻のやうなものだ。』

『おいおいお前たちは一體何者だ、おれたちは海賊なんかには無^ないぜ、皆自分で稼いでゐるんだ。』

ヤソンは前へ出てまづこの町の立派なことや、港のよくできてゐることや、また船の澤山あることなんかを賞めてさていふには、

『あなた方はきつと海の神ポセイドンの申し子で、皆立派な船乗

りさんたちに違ひない。それにひきかへ私^{わたし}たちは哀^{あは}れな船頭で、遠い所を漕ぎ歩いたもんですから、お腹はへる喉はかたく誠に困つてしまひました。どうかお願ひですから水と食べ物を少しばかり下さいませんか。さうすればまた樂に漕ぎ出ることができます。』

すると船頭は笑ひながら、

『あゝお前さんはなかなか伶俐だ、さうお前さんの方で正直にするなら私の方でも正直にしてあげるよ。さあこつちへお上んなさい、いゝものをあげるから。』

そこで皆は陸へ上りました。しかし長い間船乗りばかりしてゐたのですから、鬚はぼうぼうと生へ、顔は日に焼け、着物はほこ

ろび、槍刀は錆びてゐましたから、見てゐる人は皆笑ひました。
 『やああいつらは生船頭だぜ、年中船に酔つてゐた人のやうだ。』
 『なんだあの歩きつきは？まるであひるのやうにひよこひよこしてゐら、ハ、ハ、ハ。』

なんていひましたから氣の早いイダスはむつとして拳固をふり上げましたが、しかしヤソンはまあまあといつて抑へました。すると一人の丈の高い立派な商人の親方がいふには、

『そんなに怒るもんぢやない、船頭なんていふものはよく冗談をいふからね。しかし私たちはまじめにおもてなしをしてあげる積りだ。何だかどうもお前さんたちは力といひ丈といひ、またその槍刀といひ、なみ大抵の船頭とはちがふやうだ。まあ王様

のアルキノウスの御殿へくるがい、そこで一つ御馳走をしてあげよう、それからあとでお前さんたちの名をゆつくり伺ふとしませう。』

かう親切にいつてくれましたが、メデイヤは却て迷惑顔、頭を下げて震へながらヤソンの耳へ口をつけ、

『ヤソンさん、私たちはだまされたんですよ。うかうかすると命をとられるかも知れない。私はさつき人ごみの中で故郷の人を見たのよ、眼の黒い鐵の鎖維子をきてゐる追手をさ。』

しかしヤソンは今更そんなことをいつても、もう遅いといつて取り上げず、親方の方を向いて、

『時にこゝは何といふ國で、どうしてまたこの町ができたので

すか。

親「さればさ、こゝはコルキラといふ島で、海の神ポセイドンの
お子様の、ナウシトウスといふ方が初めてこの町をおこしらへ
なすつたので、今ではそのまたお子様のアルキノウスといふ方
が王様になつて入らつしやる。それから皇后様のアレーテとお
つしやる方は、世界一の智る者でござるぢや。』

(十九) 歌の徳

遠征隊の人たちは商人の親方に案内されて、大理石をしきつ
めた道を通り、アルキノウス王の御殿へつききました。さうして立
派なお部屋へ連れてゆかれましたが、方々の柱や戸は皆金銀でこ

しらへ、周り中には美しい布のかゝつてゐる席があります、そこ
は商人の親方たちが大勢集つて御馳走をたべるところで、また所
所に金でこしらへた小兒が立つてゐて、其中には蠟燭をもつてゐ
ます、これは夜になると燈をつけるので、その明るいことゝいつ
たら晝間に負けない位なのです。外の方を見ると立派なお庭には
甘さうな實のなつてゐる樹が澤山あつて、また夏でも冬でもきれ
いな花が、絶えることなく咲いてをります、さうしてまん中には
水晶のやうな泉水があつて、雪のやうな水烟をたてゝ噴きでゝを
ります。

正面にはアルキノウスがお后のアレーテと一緒に金の盃をもつ
てお酒盛りをしてをりましたが、遠征隊の入つてくるのを見て王



様は立ち上り、よくきてくれたと仰せになりました、さうしてお給仕にいひつけてお膳を運ばせ、肉やお酒やら、大そう御馳走をいたしました。しかしメデイヤは震へながらアレーテのお后様の傍へより、膝をついていひますには、

メ『お后様、どうかお願いでございますからお父さんの國へは歸して下さいませ。たゞこのまゝ見逃がして下さいまし、もう私は十分に苦しい思をいたしました。』

后『あなたはどなた？さうして今のお願といふのは一體どうした譯でございますの？』

メ『はい、私はメデイヤでございます。けふ私はこゝで故郷の人を見ましてございます、あの人たちはきつと私を捕へにきたの

にちがひございません、もし捕へられて國へかへらうものなら、それこそどんなめにあはされるかしのれないのでございませ。』

するとアレーテは迷惑さうな顔をして、

『これ侍女たちや、この人をあちらへつれておいで、さうして商人の方々に任せるがいゝ。』

これをきいてアルキノウスは立ち上り、
『こりやお前達は一體誰だ？さうして此女はまた何者であるぞ。』
ときゝましたから、ヤソンは前へ出て、

ヤ『はい私たちはミニエルのものでございます。只今この女の申したことは皆ほんとうなので、我々はアイエーテスのコルヒス



へいつて、金の羊の皮をとつてきたものたちなのです。さうして今まで誰もあつたことのないいろんな怖ろしいめに出あつて、仲間をなくすやら死にそこなふやら、實に苦しい思ひをしてやつとのことでもさうまできたのでございます。どうか王様、私たちをこのまま無事にやらして下さいまし、さうすれば世間では皆あなたのことを、いゝ王様だといふにちがひございませぬ。』

王『むゝではあなた方は音に聞えたアルゴナウトか、それはもう私もアルゴナウトの遠征隊をお客にしたといふことは自分の名譽ばかりか、孫子の代までも名譽なことだと思ふ。しかしコルヒスの追手たちもやつぱり私のお客なので、もう此間からこゝ

にきてゐて、毎日船軍を整へては、ヘラスへ探しにいつたのだけれども、どうしてもお前たちをみつめることはできなかつたのだ、さうして敵を討たないからにはなんでも國へ歸らないといふ決心であるのだからな。』

王『それなら王様、あのコルヒス人の中から強い人をよらせて、私どもと一人一人に勝負をさせて下さいませんか。』

王『いやこゝでそんなことをしてはならん、また外へ出たにしろ向うは人数が大勢あるから勝たうも知れない、私は正しいことをするのが好きだから、なんとか両方とも恨みつこのないやうにしてあげよう。兎に角まあ今夜はゆつくりと休んで、道中の珍らしいお話でも聞かうではないか。』

そこで皆にお湯へ入らせ、新らしい着物を着換へさせ、御馳走を食べさせた後で敵も味方も皆して庭へ出て、いろんな遊びをいたしました。アルキノウス王はまた、琴弾きを呼んで面白い歌を歌はせ、大そう陽気にさわりましたが、終にはミニエルの人たちに向ひ、

『アルゴナウトの勇士さん、なんとあなたの方でも一つ面白い歌をおきかせなさい。』

するとオルホイスは縦琴をとり、イオルコスを出かけたことから、恐ろしい森の中で金の羊の皮をとつたこと、其時に大蛇を降参させたこと、それから海を越して山を越して、いろんな怖いめにあつたことから、魔女が島の歌くらべ、サイラのろくろつ首、

さてはカリブヂスの渦巻などと段々歌つてゆきました。何しろ世界一の歌の上手ですのにその歌はみんな自分がほんとうに見てきたことなのですから、巧い巧くないのつて王様お后様をはじめ、家来や侍女までが皆涙を出し頭を下げてきてをります。やがてオルホイスは撥をおいておしまひにしますと、皆もうぼんやりして魂がとろけてしまつたやうでありました。

お后様のアレーテはオルホイスの歌ですつかり心がとけてしまひ、何だかメデイヤがかわいさうで堪らなくなりましたから、王様に願つて許してもらふことにしました、そこでアルキノウス王はコルヒスの人たちとアルゴナウトの遠征隊を集めて、まづコルヒスの人たちに向ひ、

『あなた方はミニエルの勇士たちと戦つて、メデイヤを捕へる役目をもつてこゝへきたのだが、一つよく考へてもらはなければならぬことがある。それは外でもないが、ミニエル國はすぐお隣のことだから、私たちは度々顔をあはせるやうになるし、またコルヒスのアイエーテス王の方は、大變遠い所にあるのだから只名前をきく位でめつたにあふといふこともない位、だによつて我々に近い人を怒らせるのと遠い人を怒らせるのとは、どつちが安心なものだらうか一つ考へてもらひたいものぢや。』かういつてまたミニエルの遠征隊の方に向ひ、

『なんとアルゴナウトの勇士さん、御覽の通りコルヒスの人たちが大勢メデイヤを捕へにきてゐるのだが、どうしたものだらうか。』

といひますとヤソンは一番智るのある人ですから、ずつと前へすゝみでて、

『コルヒスの人たちは無駄な役をいひつかつたと私は思ひます。あなた方は無事にメデイヤを捕へることができると思つてゐるのですか、どうも甚だ危いことだと思はれます、なぜといへばあのメデイヤは御承知の通り怖ろしい魔法使なのですから、捕へようとしたつてなかなか捕へられるものではありません。よしまた船の中へ連れこんだところでどんな怖ろしい魔法を使つて、船をひつくりかへして逃げ出すか分りません。そんなことをするよりかもあなた方は長くこゝへとまつて立派な町をこし



らへ、安樂に暮らした方が却つていゝちやありませんか。』
 するとコルヒスの人だちもメデイヤの魔法はもとより恐れてゐ
 るのですから、それもヤソンのいふ通りだし、また王様のいふこ
 ともなるほどさうだと思ひましたから、とうとうメデイヤを捕へ
 てかへることをやめ、そのかはり北の方のアドリヤチックといふ
 所へいつて町をこしらへました。そこでアルゴナウトの遠征隊も
 王様のアルキノウスに別れを告げ、コルヒスを後にしてまたも海
 へ漕ぎ出しました。

(二十) 目出度凱旋

其中にまた暴風にあつてアフリカのヌミジヤとキレネとの間に

ある、シルチスといふ所へ吹き流されましたが、こゝでもつてカ
 ントスといふ仲間の一人は野蠻人のなげた石に當つて死んでしま
 ひ、それからまたモブソスといふ人は毒蛇にかまれて死んでしま
 ひました。

そこでまた北の方へ漕ぎ出しましたが、もう食物はなくなる水
 はなくなる、皆青い顔をして我慢をしてゐましたが、やがて向う
 の方に一つの島をめつけました。それはクリート島といふ島で、
 イダといふ山のてつぺんがまつ青になつてよく見えます。皆は大
 さう喜んで早くあの岸へこぎつけ水をもらはうと思ひますと、い
 つのまにかその崖の上の松の木よりも丈の高い身體中眞鍮で固め
 た人かでてきて、手を上下にふりながら、





『おいおい、貴様たちは海賊だらう？盗賊だらう？そんな奴がこ
こへ上らうもんなら殺してしまうぞ。』

といひますから遠征隊の人たちは、いや海賊ではない水を少し
もらひにきたのだといひましたが、どうしてもきません。なん
でも海賊だ盗賊だ上れば殺すといつてどこかへかくれてしまひま
したから、遠征隊は困つてしまひ、楫をおろして途方にくれてゐ
ました。するとメデイヤは皆に向ひ、

『私はその大男を知つてゐます、あれはタロスといふ名前、火の
神様がエトナ山の上でこしらへた人なのです。さうしてこのク
リート島を守るためによこしたので、毎日々々三度づゝ島を見
廻はるのが役目なのです。それでもしよその人が上つてゆかう

ものなら、山の上にある籠の中へ飛び込んで身體中をまつ赤に
やき、さうしてその手でとつつかまへて焼き殺してしまふので
す。』

すると皆は大そう驚いてどうしたらよからうかといひますと、
メデイヤは皆に向ひ、

『そんなに御心配なさいますな、なんでもあのタロスめの身體に
は一つの脈があつて、その中に熔けた火が廻つてゐますが、そ
の脈所は釘でうちつけてあるといふことですから、その釘付け
にしたところさへめつかれば、そこから熔けた火が皆溢れて
しまひます。さうすればもう安心して岸へ上り、水でも食物で
も樂にとつてこられます。私もその脈所をよく知りませんが、





一つめつけてやらうと思ひますから、兎に角向うの岸へ私だけ
 上げて下さい。』
 といひますのでそれではといつて岸へ漕ぎつけ、メダイヤを殘
 してどうなることかと待つてをりました。
 程なくさつきの眞鍮の大男が、身體中を眞赤にやいて出てきま
 したが、足下の草はしゆうしゆういつて白い煙を噴きました。メ
 デイヤは早くもこれを見て、

人の命は短いものよ、

金の人でも死なねばならぬ、

金も銹びれば火も消える、

神の血精のある人は、

花のさかりの凋まらず枯れず、

いつまでたつても年よオラア

ぬ。

と妙な節で歌ひますと、タロス

の大男はメダイヤの方へ向ひ、

タ『お前さんは誰だ、さうして神

の血精つていふのはどこにある

のかい。』

メ『あゝ神の血精ですか、それは

ここにあります。』

といつて水晶の壘をポケットか



花のさかりの凋まらず枯れず、
 いつまでたつても年よオラア
 ぬ。
 と妙な節で歌ひますと、タロス
 の大男はメダイヤの方へ向ひ、
 タ『お前さんは誰だ、さうして神
 の血精つていふのはどこにある
 のかい。』
 メ『あゝ神の血精ですか、それは
 ここにあります。』
 といつて水晶の壘をポケットか

ら出して見せると、

タ『なんとお嬢さん、私にそれを少し分けては下さるまいか。』

メデイヤは甘くいつたと思ひましたが、嬉しい心を顔色にも出さず、却つて困つたやうな顔付をしてわざと惜しさうに、

メ『さあこれつきりしかないのだから、ほんとうなら一滴だつてあげられないのだけれども、あなたのことだからそれちや少し分けてあげやう。が、これを脈へいれるにはまづ海の水の中へ入つて身體を冷やし、さうして釘附にしてある脈所をお出しなさい、私が注いであげるから。』

するとタロスは長生きができることゝ大喜びで、自分の命がなくなるのも知らずに海の中へとびこみますと、しゆつといつてそ

こいら中煙が一杯になりました。さうして釘附けにした脈所をメデイヤの前へ出し、どうかお願い申しますといひますと、メデイヤは壇の水を注ぐ代りに、却つてその釘を抜きましたから眞赤な火がどろどろと流れ出してしまひました。タロスはとび上つて、

『おのれ人をだましたな。この嘘つきめ！』

とくやしがりしましたが、もう身體はすっかり冷たくなりまして、たから、どさりと倒れて死んでしまひました。メデイヤは笑ひながら海へ向ひ、おいでをしますと皆は喜んで岸へ上り、水だの食物だのを十分に積み込んで出かけました。

それからマリヤの岬で罪を清め、ラコニヤの岸についてスニウムの岬から細長いエウボイヤの海峡を通つて、やつとこさでペリ



オンへ歸つてきました。もう人の顔が皆變つてしまつて、誰一人識つてゐる人にあひません。はりあひがぬけてぼんやりしてゐましたが、漸く道を教つて久しぶりでペリアスの御殿へゆきました。するとペリアスもアイソンももうもう大へんなお老爺さんになつてゐて、初めはなかなかほんとうにしませんでしたが、やつとそれと分りましたからまあまあといつて大そう喜び、その晩はもう國中の人たちが氣ちがひのやうになつてお祝ひをいたしました。それからフリクソスの魂も浮ばれ、ヤソンはまだ約束通りイオルコス王様になつて、末ながく楽しく暮しましたといふことであります。

大洪水

一大雨
二星の使



(一) 大 雨

むかしぎりしやの國にデウカリオンといふ人がありました。

この人のお父さんはプロメテウスといふ人で、これは天の大神
 ジュピテルの怒にふれてコウカサス山の上へ鎖でつながれてしま
 つたのですが、このデウカリオンは至極人のいゝ人間で、悪いこ
 となどは少しもしたことはありません。パイラといふ人間中で一
 番美しい妻と一緒にたのしく暮らしてゐました。

ところが其頃の人間は分野蠻人ばかりゐて、もう家もたて
 ず、獸もかはず、皆して仲よく住むこともせず、行儀も知らない
 し規則なども分りませんから、毎日毎日けんかはかりしてゐまし

た。それですから天にゐて見張りをしてゐるジュピテルの大神も
 朝から晩までさういふ人たちの、斬られたり殺されたり、泣いた
 りわめいたりするのを聞あきてしまひました。

そこである日のこと、外の神様たちとも相談をして、

『どうもこんなに世話をやかせるやうな人間では仕方がない。一は
 じめの中は皆いゝ人間で仕合せなものばかりゐたから、其時は
 吾々の方よりもえらいものになるだらうと思つて實は恐れてゐ
 たが、今の様ではいつどんな事を始めるとも限らないので、け
 んのんで仕方がない。かういふ人間達はいつそのこと皆亡ぼし
 てしまふより外に仕様はあるまい。』
 といふことになりました。





それで毎日毎日天から雨をどんどん降らせましたので、見る見る洪水が起り、廣い原がまづかくれ、それから森が見えなくなり、その次には山がもぐつてしまふといふやうになりましたが、それでも生きてゐる中は皆互にけんかをしたり人の物を取りつこをしたり、それはそれは悪いことばかりしてゐました。

デウカリオンはかねてこんなことになるだらうと思つてゐたものですから皆に向つて、

『お前達が悪い行をやめない以上は、しまひにはこんな苦しい責めをうけることになるのだ。』

といひきかせました。さうしてコウカサスの山へいつて、鎖につながれてゐるお父さんのプロメテウスに合つて、このことを話

しますとプロメテウスは、

『とうとう始まつたか、それではジュピテルがこの世から人間の種を絶やしてしまふつもりだらう。しかしお前はよく用心してゐろよ。』

といひました。それでも毎日毎日雨は少しの絶えまもなく、どんどんとふるので、デウカリオンは物置からかねてかういふ時の用心に、自分でこしらへた船を出して妻のパイラをのせ、日ましにふえてくる水の中に浮べました。もう見渡すかぎりのこらず水で、こないだまであつた高い木の頭もかくれ、大きな山も峯ばかりが水の上に出てゐて、小さい島のやうに見えました。こんな大洪水なので用心をしなかつた人たちは皆水の底に沈んで死んでし



まひ、唯生き残つたのはデウカリオンとパイラの二人ぎりでありました。

其中にある日のこと雨がやうやく止んで、雲の間からお天道様が光り出し、青い空が久しぶりで見えました。さうして水もだんだんに海の中へひいていつて、二人の乗つてゐる船はバルナソスのてつぺんへ流れつきました。見るともう世界中は荒れはてゝしまつて、此間まで青々としてゐたいろんな美しい花が咲いてゐた野原も、茶色になつてかれてしまひ、涼しさうであつた森も林も、骨ばかりになつてくさつてしまひ、まるで泥海の底のやうなものすごい世界になりました。

(二) 星の使

二人は悲しさうに山を下つて、どうしたらよからうかと考へながら歩いてゆきますと、いきなり後ろの方でよびとめるこゑが聞えました。二人は覺えずふりかへつてみますと、岩の上には高い若い王子が立つてゐました。その人は丈の高い青い眼をして、黄色い髪の毛の生へてゐる人でした。さうして帽子にも靴にも翼が生へてゐて、手には蛇のまきついてゐる金の杖をもつてゐました。これはメルキュリイといふ星の神様で、いろいろ天のお使をする神なのであります。

星『お前たちは何か望みがあるか。』



デ『はい私はどうかもう一度、たくさんの人がゐるやうににぎやかな國にしたいと思ひます。これではさびしくつてさびしくつて仕様がありません。』
 星『むゝそんなら山を下りながらお前のお母さんの骨をひろつて、それを肩越しに投げてごらん。』
 といつて空中にとび上り、どこかへ見えすなりました。すると妻のパイラは『何のことでせう？』とデウカリオンにきゝました。デウカリオンは、
 デ『さうさ、なんでもお前達のお母さんの骨といつたが、吾々のお母さんといふときつとこの地球のことも知れない。なぜつていふのに人間は皆この地球の上で生れるものだからね。しか



し骨といふのは一體何をいふのだらう？』
 『あゝ骨といふのは、ことによつたら石つころのことかも知れ
 ませんね。なにしろ今の神様のいつた通り、一つ山を下りなが
 らやつて見ようぢやありませんか。』

『なるほどさうかも知れない。とにかく悪いことではないか
 ら、むだぢと思つて一つやつて見よう。』

といつて二人はパルナソスの山を下りながら、石をひろつては
 肩越しになげつけました。

するとまあ何と不思議ぢやありませんか。デウカリオンがほう
 る石は皆強さうな立派な勇ましい男になり、またパイラのほう
 る石は皆可愛らしい美しい女になりました。そうして日のくれるま

でにはもう山の上から下まで、また廣い野原も森の中にも大勢の
 人間が、大そう賑やかに笑つたりおどつたりしてゐました。

そこでデウカリオンは王様、パイラはお妃となつてこれらの人
 を治めました。皆よく王様のいひつけに従つて正しく働きました
 たから、ずんずんと立派な人たちになり、またこの國もえらい國
 になりました。これは後にヘラスといふ名のついた國で、今日吾
 吾がぎりしやといつてゐる國のことです。



でにはもう山の上から下まで、また廣い野原も森の中にも大勢の
 人間が、大そう賑やかに笑つたりおどつたりしてゐました。

そこでデウカリオンは王様、パイラはお妃となつてこれらの人
 を治めました。皆よく王様のいひつけに従つて正しく働きました
 たから、ずんずんと立派な人たちになり、またこの國もえらい國
 になりました。これは後にヘラスといふ名のついた國で、今日吾
 吾がぎりしやといつてゐる國のことです。



魔頭牛

- | | | | | | | | | |
|----|-------|------|------|-------|--------|------|-----|------|
| 十七 | 十五 | 十三 | 十一 | 九 | 七 | 五 | 三 | 一 |
| 命 | 怜悯な悪者 | 敵の使者 | 魔女の盃 | おひはぎ | 骨の山 | 女神の群 | 決心 | 力もち |
| の | | | | | | | | |
| 絲 | | | | | | | | |
| | 十六 | 十四 | 十二 | 十 | 八 | 六 | 四 | 二 |
| | さいゑる堂 | 黒帆の船 | 秘密の罪 | 從兄弟同士 | 不思議の寢床 | 正覺坊 | 蜘蛛男 | 二品の寶 |





(一) 力もち

むかしぎりしやはトロイゼンといふ所にピテウスといふ王様の
王女である、アイトラといふ方がありました。

この王女には國中で一番強いテセウスといふ一人の王子があり
ました。ところがお母さんのアイトラは自分の子に向ふ時の外は
笑顔をしたことがありませんでしたが、それはなぜかといへばお
母さんは夫に棄てられたので、そのまた夫といふのがどこか遠く
へいつてしまつたからなのでありました。

アイトラはいつでもトロイゼンの山へ登つて、ポセイドンのお
寺へお参りをし、それから一日そこで入江を見わたし、メタナを

越して遠くアイギナの紫色をした山の峯だの、またひろくアツチ
カの海岸だのをながめてをりました。テセウスが丁度十五の時
でしたが、お母さんはテセウスを連れてお寺へゆき、境内に繁つて
ある森の中へ一緒に入りました。さうして一本のすぐかけの樹、
その下には小さな灌木が藪のやうに生ひ茂つてゐるところへつれ
てゆきました。さうしてそこでお母さんはため息をしていひます
には、

『テセウス！お前その藪の中へ入つていつて、そのすぐかけの樹
の下にある大きな土臺石をさがし、それをもちやけて下にいけ
てあるものをもつてきておくれ。』

そこでテセウスは藪の中へ入つてゆきましたが、そこいらにあ



る木は幾年も幾年も生へたまゝであらうと思はれました。あちこちと根の方をさがしてゐる中に、なるほど一つの大きな土臺石を見つけました。それは蔦だのいら草だの、苔だのが一面に生へてゐました。テセウスはもちやげようとしましたが、なかなかもちやがりません。しまひには熱くなつて額からポロポロと汗が流れ、残念で涙が出るほど力を入れてみましたが、とてもためでありました。そこでとうとうお母さんのところへゆき。

『お母さん石は見つかりました。けれども私にはとてももちやげることにはできません、あれは私ばかりでなくこのトロイゼン中の人には、誰だつてももちやげるものはあるまいと思ひます。』といひました。するとお母さんはため息をしていふには、

『神様達はお待遠でせう、併しもうどうせおしまひなのです。よしし來年にでもなつたらもちやげることができませう。お前はいまにきつとこのトロイゼン中の誰よりも一番強くなる時がくるにちがひない。』

そこでお母さんはテセウスの手をひいてお寺へゆき、お願ひをして山を下り家へかへつてゆきました。

それから丁度一年たつた後、お母さんはまたテセウスをお寺へつれてゆき、石をもちやげさせましたが、やつぱりためでありました。

するとお母さんはため息をして、前と同じことをいつてかへりました。それからその翌くる年またやつてみましたが、これもや

つばりだめでした。その次の年もいけませんでした。するとテセウスはお母さんにその石のいはれをきかせて下さいと願ひ、また石の下には何がいてあるのですかとききました。お母さんは唯いやな顔をしてそれをきかれるのをいやがるやうでした。

そこでテセウスは獨言をしていふには、

『よしよし、トロイゼン中の人が一人もちやげることができなかつたつて、今にきつと私もちやげられる時がくるにちがひない。』

それからといふものは體を丈夫にし力を出すために、毎日角力をとつたり、投槍をしたり、馬をひきまはしたり、熊狩をしたり、また岩の間をかけまはつて山羊や鹿をかりしたりしました。

それですからもう山中に誰でもテセウスのやうに、す早い獵師はあませんでした。それからまたテセウスは國中を荒したクロムミヨンの荒猪のパイアといふのを退治しました。それですから人々は皆テセウスのことを、『あの人にはきつと神様がついてゐるのだ。』といひました。

(二) 二品の寶

それから丁度テセウスが十八の年を越した時、アイトラはまたお寺へつれていつて、

『テセウス！ さあけふはどうでもあの石をもちやげてごらん。でなければお前の名まへは世の中の人に知られないよ！』

といひました。そこでテセウスはまた森の中へ入つていつて石の前に立ち、それを推しますと少し動きました。するとテセウスは俄に元氣づいていふには、

『もしおれが身體中へ氣をくばつて、えいとやつたらきつともちやがらないことはないぞ！』

そこで一生けんめいそれを動かして少しもちやがりましたから、占めたぞといつてえいと一ころゑ！一ころころとところがしてしまひました。

テセウスは下をのぞいてみますと、穴の中に一口の青銅でこしらへた、さうしてピカピカ光る金の櫛の刀と、一足の金の草鞋がありました。テセウスはそれをとりあげ、荒熊のやうに森の中を

とび出してお母さんのところにかけてつけ、その二品を高く頭の上へさしあげました。

するとお母さんは着物の袖で顔をかくしたまゝ、暫だまつて泣いてゐました。テセウスはどうしたことかと思議に思つてゐましたが、何だか悲しくなつてきて、やつぱりお母さんのやうに泣き出しました。その中にお母さんは泣くのをやめて頭をあげ、唇に指をあてゝいふには、

『テセウス！それをお前のふところへしまつて、私と一緒に海を見下ろせるところまでおいでなさい。』

そこで二人はまたお寺へゆき、きらきらする青海を眺めながらアイトラがいふには、

母『テセウス、この足下の國が見えるか。』
テ『はい、これはトロイゼンです。これは私が生れてけふまで育つた國です。』

母『さやう、これはたゞ小さなけはしい山だらけな國だが、ずつとあのさびしい北の方をごらん。むかうにまた國が見えるだらう？』

テ『はい、あれはアツチカです。あすこにはアゼンスの人たちが住んでゐるのです。』

母『テセウス、あすこは實に美しい大きな國で、温い南へ向いた國なのです。あの國には橄欖の油や蜜がたくさんでき、また神様や人間たちの喜びがあふれてゐるところです。神様は山をも

つて四方を守り、その山の脈には銀がたくさんあり、また雪のやうな大理石が山の骨になつてをり。牧場には莖やしやくまゆりがあり、いつでも水の一杯になつてゐる流の岸の森の中では、一日鶯がないでゐるのです。あすこにはよく開けた町が二十もあつてそこには大昔の神様の血筋をついた人たちもゐます、その人たちはこの世界の神様のお子様にあたるキクロプスといふ人のこどもたちなので、皆金の髪の毛の中に金の蟬がついてゐて、また蟬のやうに空中をとびまはり、蟬のやうに一日歌をうたひ、温い日に當つて楽しく暮らしてゐるのです。テセウス、もしお前がさういふ國の王様であつたらお前はどうしますか。』

テセウスはおどろいて廣々とした輝いてゐる海を越して見ますと、向うにスニウムの岬からヒメタスやベンテリカスの方まで見渡され、アゼンスをとりかこんでゐる山々の頂がみえました。しかしアゼンスの都は海をこして向うの國の丁度中程に立つて、前を遮つてゐる紫色したアイギナの山のために見ることはできませんでした。テセウスは俄に氣が大きくなり、

『もし私があの國の王様であつたら、上手に國を治めて智恵をつくし力をつくしてよいところになります。さうして私が死んだら皆お墓の前で泣きながら「あゝほんとうにいゝ王様でした」といはせます。』

するとアイトラはほゝゑんで、

『そんならその刀と草鞋をもつてパラス山の上にある、アゼンスの王アイゲウスのところへおいで。さうして「石はもちやがりました。しかし誰がこれを下へ埋めておいたのですか。」とおききなさい。さうして刀と草鞋を出して見せ、あとは神様がどうなさるかそのおいひつけどほりにやつてごらんなさい。』

『おゝお母さん、私はあなたにお別れするのですか。』といひました。しかしお母さんは、

『泣くではありません、テセウス。運といふものはどうしてものがれることはできないのに決つてゐるものです。また悲みといふことも唯泣いてばかりゐて何にもしないものたちにはわけ



ないことです。私の若い時は悲しいことばかりでした、私の年頃になつてからもやつぱり悲しいことばかりでした。私の若い時はキミイラといふ化物を退治したレロホンといふ人のために悲しい目にはかりあひました。其人は私の父が謀反をした奴だといつておひだしてしまつたものです。また私の年頃になつてからもやつぱり謀反をしたお前のお父さんとまたお前のために始終悲しいめにばかりあひました。私の年とつてからもきつとやつぱり悲しいめにあふのでせう。(それは私が夢にちやんと見たのです) スワンといふ悪者の息子たちが私をとりこにしてエウロタスの洞穴へ送つたのです。さうして海を越してゆくまで召使になつてぎりしやの悪病やみの看護婦にされたのです。

しかし私は仇をうつてもらふことができました。それは金の髪の毛の生へた勇士たちが、舟にのつてトロイにきた時、其人たちがイリウムのお宮を奪ひとりましたが、其の時私の息子は私をとりこの中から助けてくれたので、また私はテセウスの名譽の話もききました。しかしやつぱり私はその上にまた、外の悲しいめをみるでせうが、私はもうそんなことは過ぎ去つた昔のことだと思つて我慢しようと思ふのです。』

そこでお母さんはテセウスに接吻して抱へたなり泣いてゐました。さうしてお寺へゆきました。テセウスはもうそれつきりお母さんにあふことはできませんでした。





(三) 決心

テセウスはいろんなことを考へて、一人とりのこされてゐましたが、初は港の方へ下りていつて早い船にのり、入江を横切つてアゼンスへゆかうと思ひましたが、それさへ何だかもどかしいやうな心持がして、何でも海ををびこすやうな羽が生へてくれ、ば、それで一飛びにお父さんにあひにゆかうと思ひました。けれども暫くして自分の思ふとほりにならないので、ため息をついて獨言をしていふには、

『もしお父さんに外の子供があつたら誰れを一番かわいがるだらう？もし私を引きとつてくれない時はどうしたらよからう？も

しまた私がどんなえらいことをしたらお父さんは私を引とつてくれるだらう？何しろお父さんは私が生れてからまるつきり私のことは忘れてゐるんだからな。どうして今時分私をひきとつてくれようか、きつとりあはないにちがひない。』

暫悲しげに考へてゐましたが、やがて大聲にいひますには、

『さうだ！私はお父さんにかわいがらせよう。それには何でもお父さんにかわいがらせるだけの、えらいことをして見せなければならぬ。よし私は一つ名譽をあげよう、さうしてお父さんのアイゲウスがよし五十人の大勢の子供がゐても、私のしたことを喜んで皆にテセウスはえらいと自慢するやうなことを、してみせなければいけない。昔ヘラクレスといふ人なんかは、エ



ウリステウスといふものゝ下男でひどくいぢめられたけれども、とうとう自分でえらいことをしたではないか。ヘラクレスは盗人だの悪いけものだのを皆退治したり、また大きな湖や沼をほして畑にしたり、その棒一つで山を切り開いたり、いろんな手柄を現はしたではないか。それだから皆ヘラクレスをほめてえらいえらいといったが、それといふのも皆世の中の人たちの不幸をとりのけて、子や孫の代までも楽しく暮しをさせた手柄があつたからなのだ。よし私もヘラクレスがしたやうな手柄を立てにこれから一つどこへゆかうか。どこかでえらい冒険をやつて大盗人でも化物でも、鬼でも蛇でも退治してみたいものだ。それでは先づ國中をまはつてみやう、さうして山の中へ

入つたり、イツムスの海峽を歩きまはつてみよう、さうしたらきつと何か面白い冒険談があるにちがひない、それをきいたら一つお父さんにかわいがられるやうな、えらい手柄を立てゝくれよう。』

(四) 蜘蛛男

そこでテセウスはお父さんの刀を腰に、國中を歩きまはつて山の中へ入り、とうとうしまひに蜘蛛山といふおそろしい所へきました。その山はエピダウラスを越えて海の方まで續いてゐるの、真中にある一つの頂きから下の方にいくつもの谷々が、丁度日の光が蜘蛛の網にうつるやうに擴がつてをります。

テセウスはさびしい谷へ入つてゆきました。さうして皺のやうになつた大理石の山あひをぬけて。もう足の下の方には青々とした低い土地が見え、頭の上には雲がじめじめと通つてゐるところへきました。

蜘蛛の網のやうな谷をだんだん上つてゆきますと、四方にせまい深い穴が、下の方に見おろされました。また半分霧にかくれたまつ暗な割れ目がいくつもあり、その上の方におそろしい丘も見えます。

けれどもどうしてもその丘を越さなければもう外には、右にも左にも道はありません。そこでテセウスは草むらをかき分けて、石の積み重ねてあるところまで上つてゆきました。



すると石の上に一人の人が坐つてゐて、熊の毛の外套をきてゐました。その熊の頭は帽子の代りになり、齒は額のあたりに白く光つてゐます。足はまた喉のところまで結ばれ、爪が胸のあたりに白く光つてゐます。この男はテセウスを見ると立ち上り、谷中が震へるやうな大きなこゑで笑ひました。

『こちらお前は誰だ？この蠅め！』



蜘蛛の網の中をくゞつてきたのか。」

しかしテセウスはしつかりと歩いて返事をしませんでした。けれども心の中では、

『こいつ何ても盗人にちがひない。いよいよおもしろい冒険が始まつてきたぞ！』

するとその奇體な奴は、前よりも大きなこゑで笑ひさうしていふには、

『こりや大膽な蠅虫め、貴様はこの谷が一度ひつかゝつたら二度と出られない、蜘蛛の網だといふことを知らぬのか。またこの丘は蜘蛛の家で、さうしてこのおれは蠅共を吸ひとる蜘蛛だといふことを知らぬのか。こゝへこい、さうしておれの餌食にな



れ。逃げようとして逃げ道はないぞ。ちやんとおれのおやぢのへハイストスが、おれのために網を張つてくれたのだ。おやぢが山の中にかういふ割れ目の深い谷をこしらへた時から、誰一人だつて家へはかへれなかつたのだぞ。』

しかしテセウスは氣をくばつて進みより、

『してお前の名は何といふのか。大膽な蜘蛛男さん！さうしてどこにお前の牙があるのだ。』

すると奇體な奴は笑つてまた、

『おれの名はペリヘテス。山の神へハイストスとアンチクレイアの子だけれども人間はおれのことを棒使ひのコリネテスといふのだ。また蜘蛛の牙はそれこゝにある。』



さうして傍の石をのけて青銅の大きな棒を取り出しました。
 『これはおやちが山の下へいつて自分できたへたもので、おれに
 ゆづつてくれたのだ。これでもつておれは生意氣な蠅めらをた
 たきつぶして、いろんな甘いものを取るのだ。さあ貴様もその
 ぎらぎらする刀や上衣や、金の草鞋を皆おれによこせ。でなけ
 ればこれでぶつ砕いてくれるぞ。』
 するとテセウスは上衣をぬいで、手早く左の腕にまはし、肩か
 ら手へかけてしつかりと捲き付け、スラリと刀をひきぬいて棒使
 ひに切つてかゝりますと、棒使ひも亦テセウスに打つてかゝりま
 した。

蜘蛛男はテセウスに三度打ちかゝり、柔かい木の枝のやうに叩

き折つてしまはうとしたが、しかしテセウスは上衣が捲き付けて
 ある左の腕で、自分の頭を守りました。

それからテセウスは柔かい木の枝が風になびくやうに、打ち下
 ろす棒の下をかいくゞつて、刀で棒使ひをさし通しましたが、ゆ
 るりと捲いた熊の皮のために蜘蛛男は危い命を助かりました。

するとテセウスは氣をいらつて男のそばへ進みより、喉のそこ
 へろ抱てを引き倒すと、二人とも一緒にころがりましたが、しか
 しテセウスは起き上つて蜘蛛男を足の下にしてしまひました。

それからテセウスは蜘蛛男の棒をとり上げ熊の皮を剥いで、身
 體は鳶や鳥の餌食に残しておき、遠い坂道を下つて谷をおりてゆ
 きましたが、しまひには廣い青々とした谷へきました。さうして





木の下にねてゐる羊や牛の群れにあひました。するとそこに岩や木の下に美しい泉があつて、そのわきで女神と羊飼が舞をまつてゐましたが、皆でをどつてゐるのに誰も鳴物をならしませんでした。

皆はテセウスを見るとびつくりし、羊飼はかけ出して獸の群れをつれて逃げてゆくし、女神は鴨のやうに泉の中へ入つて見えなくなつてしまひました。

(五) 女神の群

テセウスは不思議に思つて笑ひながら、

『奇妙なをどりをしてゐた人たちが、見なれないわたしがきた

ためにどこかへいつてしまつた。さうして鳴物なしでをどつて

ゐたのだな。』

テセウスはもうつかれて。からだもほこりにまみれ、のどもかはいてゐました。それですから逃げた人たちについては何も考へず、きれいな水たまりで水をのんだり行水をつかつたりして、やがてすぐかけの木の影へ倒れてしまひましたが、水が石から石へと滴つて、テセウスをねかしつけるやうな歌をうたつてゐるやうに聞えました。

テセウスは目が覺めますと誰だか咳いてゐるゝゝゝが聞えました。さうして女神が苔の緑色したふとんの上に坐つてゐる洞穴の暗い中から、泉を越して覗いてゐるのを見ました。一人がいふに

